
神運の子

魔の間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神運の子

【Nコード】

N2010K

【作者名】

魔の間

【あらすじ】

新王戴冠の日に突然、しかし必ず現れる一人の女。人にあらざる美で、女に狂っていた王を虜にする。そして今宵また、若き新王の前に女が現れる・・・

1 歴史は語る（前書き）

そんなに長くない物語になると思います。

先はどうなるかわかりませんが、とりあえず年齢制限なしで。

1 歴史は語る

ある所に一つの国がありました。

とても広く、とても裕福な国でした。

民は皆、国を統べる王様を愛し、尊敬していました。

しかし、その王様にはたった一つ欠点がありました。

なんと王様は筋金入りの女たらしだったのです。

東に美女の居る国ありと噂を聞けば、行つてさらい、

西の美しい乙女が助けを求めれば、国の全武力をもって助けます。

そこには国の条約も、悪女も関係ありません。

無理が祟ったのか、国は少しずつ傾いていきます。

民は嘆きました。

どうにかしてくれと神に泣き縋り、祈りました。

そんな日々が続いていたある日、一人の女が王様の前に現れます。

その女は、これまでになく素晴らしい美を兼ね備えておりました。

肌は誰よりも白く、髪は光り輝き、目はまるで宝石の様に澄み渡っていました。

あまりの美貌に、一瞬で王様は恋に落ちました。

誰かが噂を流します。

あれは天から舞い降りたのだ。

いやいや、あれは神が我等の嘆きを聞き入れて遣わしてくださったに違いない。

いいや、違うとも！あれは陛下の運命だったのだ！

王妃となった彼女に首ったけな王様は、他の女に見向きもしません。

今の内にとばかりに頑張った文官達の努力もあって、国は元の姿を取り戻します。

ほれみろ！王妃様はやはり、神が遣わして下さった方なのだ！

やっぱり王妃様は、陛下の運命の御方だったんだ！

天を捨ててまで舞い降りられた覚悟に感謝します。王妃様。

様々な場所で議論が飛び交います。

ええいつ！もうどれでも良い！適当にまとめて神運の子とでも呼べば良からうに！

誰が発した言葉だったのでしよう。

その言葉は瞬く間に広まり、いつしかそれは王妃の代名詞となりました。

神運の子あらざれば、王妃にあらず。

いつしか囁かれ出したその噂を真実とするかのように、新しい王が立つ度に女は現れる様になりました。

いつの世の王も、現れた女に恋い焦がれます。

しかし誰一人として、女が何処から来たのかを知る者は居ません。

まさに神のみぞ知る。

それを不満に思う人は何処にも居ませんでした。

2 新王戴冠

彼のくつりと笑う声が、やけに響く。

それに従って、彼の隣に居た女も口に笑みを浮かべた。

「ねえ殿下、私こそが殿下の運命なのでしょう？」

だってこんなにも、殿下は私に会いに来て下さっているのだもの」

女が伸ばす手は阻まれる事なく、男の顔に行き着く。ふわりと男の金髪が揺れた。

「そうだよ。君達は私の選んだ女だ」

「もうっ！つれない人！」

私みたいな美人が、他に何処にいると言うの！」

頬を膨らませて拗ねる女に、男は低く笑う。

「知っているはずだよ？」

私の血筋は皆、女狂いだって。

確かに君達の容姿はとても美しい」

そう言って、男はまだ機嫌の直らない女に優しく口づける。

そして・・・

「でも、君達では私を満足させる事は出来ないのだよ」

残酷な言葉が落とされた。

「デイレイ・シー・ラジェヌ新王陛下に幸あれ！」

神官が声高らかに言い切った瞬間、耳をつんざく程大きな歓声が響き渡った。それを聞き、今まで神官に跪いていた男が立ち上がる。

流れる金髪に、空色の目。

先王と変わらぬ美貌を宿した、まだ少年の面影の微かに残る青年だった。その美しさに一層歓声が高まる。ラジェヌ王という掛け声が何度も上がっていた。

男　　ディレイは笑みを浮かべ、黒山のような人だかりに手を軽く振る。

彼を見る女達の顔が赤く変わった。

「・・・まったく罪深いな」

新王が入退場をする際に使う扉。その前に立っている警護兵が愚痴を零す。彼の目には新王の美しさにあてられ、次々に倒れる女の姿が見えていた。

「しかしこれも今日までと分かると、本当に嬉しい限りだな」
「マレー？独り言ですか？」

思考に割り込む様にして入ってきた声に、マレーと呼ばれた警護兵は姿勢を正す。

「いえ、何でもありません」

いつの間に壇上から降りてきたのだろうか、そこには新王となつたばかりのディレイが立っていた。白布に金字模様の式服を纏う彼は、同性から見てもかなり美しい。

二人は揃って扉を抜け、城内の廊下を歩く。

「もう儀は終わったんだから、その口調は無用だよ。」

「そもそも何故君が儀場に居るんだ？ 警護は君の役目ではないはずだよ、マレー將軍？」

「いやーちよつと気になった事があつてね」

「とか言いつつ、どうせ女だろう？」

「君もきつと王族と同じくらい女狂いだよ」

「いやはやそれは光栄な」

ディレイの苦笑をものともせずに腰を折つてみせるマレー。

武人には珍しく、マレーの黒髪は長い。恋愛成就という昔からある呪いを、健気にも続けているそう。

しかしそれに騙されてはいけない。彼はあのディレイと幼馴染なのだ。

切れ長の鋭い黒目に、日に焼けた浅黒い肌。一見痩身に見える彼の身体は、実に無駄のないインナーマッスルボディだ。それに、ディレイには劣るものの、彼も十分に整った顔をしている。

遊んでいないはずがなかった。

「今日で陛下は女遊びを終わるのかー」

「・・・何だ、その目は」

マレーにつられて、ディレイも口調が変化する。

「絶世の美女かー・・・いいなー」

「言っておくが、手を出したら捻り潰すからな？」

「おー怖っ！」

「ま、でも大切にしろよ？」

「勿論だ」

清々しい表情で断言する幼馴染を見て、マレーの頬が緩む。

「おー？早速惚気かー？」

（これからもこんな日々が続けばいい）

ディレイをからかいながら、彼は幼馴染の門出を祝った。

それがどうしてあんなってしまったんだろう？

ゆらりと妖しく揺れる数多の蠟燭の火が、天井から広間を煌々と照らしている。

その下で、何組もの男女が音楽に合わせて踊っていた。時折彼らが視線を向けるのは、広間の奥の上座に座す新しき国の主。

今宵の戴冠祝いの主役だ。

ディレイは貴族達が踊っているのを眺めつつ、上機嫌に酒を煽っていた。彼の斜め右後ろにはマレーが屹立し、苦笑を零している。

「そんなに飲み過ぎると、神運の子に嫌われますよ？
お酒臭いって」

マレーの言葉に何も返す事なく、ディレイは隣の空席を見てまた酒を口にする。

「神殿からはまだ何も言っ来ないのですか」
「まだ何も」

神運の子は常に神殿の奥に現れた。神の間と呼ばれる密閉された部屋に。

女が現れると部屋の扉が白く光り輝く。慌てて中を見れば、左手の甲に花の痣を持つ女が一人立っているのだとか。

「早く」

（この手に・・・）

心の内に何故か溢れはじめた焦燥を押さえ込む為に、ディレイは強く拳を握りしめた。

「早く・・・」

「？・・・陛下？」

尋常ではない彼の様子に気づいたのか、マレーが訝しそうに問う。

マレーへとディレイが口を開こうとした瞬間、バタンと大きな音を立てて広間の扉が開かれる。

不躰な来訪者を、迷惑そうに振り返る貴族達。しかしそれは直ぐに驚愕に変わる。

来訪者が纏うは白地に灰字の服、神官であつた。

神官は小走りで玉座の前まで行き腰を折ると、早口で話し始める。

「新王陛下におきましては此度の戴冠の儀、誠に」

「それは先程神官長からも聞きました。

いいから早く本題に入りなさい」

「・・・はっはい！」

神運の子が降臨致しました」

「会いましょう」

「は？」

「今すぐ会います」

「いえっしかしそれはっ！まだ準備も整っておりませぬので・・・」

「連れて来て下さい。分かりましたね？」

「・・・は、はい」

可哀相になるほど動揺した神官は、拙い足どりで広間から出て行った。

「本当にどうしたんだ？何にそんなに焦っている？」

マレーの小さな声が後ろから聞こえる。

（そうだ。私は焦っている。

しかし、何故こんなにも私は焦っているんだ？）

「私にも分からない」

身を焼く様な焦燥。少しでも遅くなればまるで何か大事な物を失ってしまうような、そんな焦り。

「とりあえず落ち着け。

お前はもう王だ」

ハッとして顔を上げれば、何やら怪訝そうな表情を浮かべた貴族

達が居た。

「一挙一動が周りに影響する。
だからもう少し落ち着け」

深く息を吸って吐く、吸って吐く・・・

「落ち着いたか？」

「ああ」

「で、お前がまずやるべき事は何か分かったか？」

「・・・とりあえず神官に対する労いか？」

「おい、それ素で言ってるのか？」

まずやるべきは、俺への感謝だろ」

ビシリと自分を指差して、にやりと笑むマレー。

彼の気遣いによってか、徐々にディレイの中の焦りは薄れてゆく。

（ありがとう）

気恥ずかしさから、ディレイは心の中だけで感謝をした。

そして再び広間の扉が開かれる。

息を止めて見つめる先に、運命はあるのだ。

2 新王戴冠（後書き）

ちなみに

戴冠時の年齢設定

マレー 18歳

ディレイ 17歳

3 彼女の生まれた世界

イタイ

私の日常はその思いで始まって終わる。

場所は、1LDKマンションの狭い一室。
敵が居ないのを確認して、私はゆっくりと身を起こした。

そう、敵。あれは親なんかじゃない。

「・・・・・・・・」

まだ痛みの残る手を見つめる。

何度も何度も傷つけられた手は、傷痕や痣だらけ。手の甲には赤く丸い斑点が数箇所にある。

昨日、灰皿代わりに使われた所だ。

何度か手を動かしてみるが、動きに支障はない。

私は立ち上がろうとして・・

「やっと起きたんだ。このノロマっ!」

絶叫した。

髪がぐいっと上に引つ張り上げられている。頭全体に痛みが走った。もしかしたら何本か皮膚ごと抜けたのかもしれない。

（敵が何故ここに?!）

「お前ホント、目障りよ。

食べ物もほとんど与えてないのに、何で死なないのかしら?」

髪を掴む手を離れたかと思えば、今度は腕を捻り上げる。

「確か、ゴキブリは水だけで生き延びられるんだっけ?

ゴキブリは害虫だわ。やっぱり殺さなきゃ!」

ギリギリという音が聞こえそうなほど強く握られる。

「・・・っ!」

「ホント、目障りな子」

敵は私を突き飛ばし、鳴り響く携帯の音と共に家から出て行った。

腕の掴まれた部分は、変色している。

（いたい・・・）

現実から逃避する為に、私は意識を手放した。

「ふふふ・・・そうよ。そうよそうよ！
何で今まで気付かなかったのかしら！」

意識を取り戻して見た物は、薄い肌色ストッキングを履いた一対の足だった。

（・・・敵！！）

あまり力の入らない腕を叱咤して上半身を起こし、敵から距離を取る為に精一杯後退る。

「そうしてると、本当にゴキブリみたいね。
でも、いいわ。殺すのに躊躇しなくて良さそうで」

うふふふと満面の笑みを浮かべて、敵は包丁を片手にこちらへと

近づく。その用途は明らかだった。

「何故早くこうしなかったのかしら？」

・・・ああ、でも苦しんでくれたなら意味はあったわ。ふふっ」

（まだ死にたくないっ！）

私は力を振り絞って敵の足を蹴りつけた。

「ぐっ、この！！！」

逆上して大振りに振られる包丁を、なす術もなく見つめる私。

（私は死ぬんだ）

そう、思った。

その時、光が視力を奪った。

ザワツと辺りが騒ぐ。

（敵・・じゃない）

薄く目を開けると、群青色の天井が見えた。キラキラと光る何かを点々と含んだ天井は、まるで星の浮かぶ夜空の様だ。

（きれい）

カツ、カツ

人の足音が近づくのを感じて、私は慌てて起き上がる。

ズキリと腕が痛むが、そんな痛みは今更のこと。

「神運の子よ、我らと共に」

人はすぐ傍に居た。

綺麗な白髪に翠の目。少し皺の出始めた顔を柔和に微笑ませ、その男は膝をついた。

彼の着る白い服の裾が、群青の床に舞った。

「私の名はムギナ。神に一生を捧げた身にございます。
ああ・・・ああどうかそんなに怯えないで下さい。

私達神官は貴女を守る為にも存在しているのです」

微笑みから一変、悲しげな表情へ。

敵とは明らかに違う、その慈愛に満ちた表情に少し身体の力が抜ける。

警戒を緩めた事が分かったのか、ムギナは安堵の息を吐く。

「貴女は我が国ラジエヌが求める宝。

いかにその御身を王が拒否なさろうと、我らがお守りします。たとえ我が命を懸ける事になろうと、この誓いは変わりませぬ。

どうか私達に信頼をお預け下さい」

何かを堪える様にムギナは告げた。

（ここは一体何処なのだろう・・・？

この人は一体何を言っているのだろうか？）

私の頭にはそんな思いばかりが回って、ムギナの言葉は全て素通りしていた。

ムギナはそんな私を痛ましい目で見、自身の背後へと視線を送る。

彼の背後には彼と同じく、白地に灰模様の服を着た人達が立っていた。

そして、その中から一人の女性が私の元へと歩み寄る。

「シュリルです。これから貴女に付き従う者、どうかお見知りおきを」

ムギナの紹介と同時に、シュリルと呼ばれた女性が深々と腰を折った。

お団子状に纏めた海色の髪に紺色の目。パチリとした目は、私に興味津々に見ている。見た感じでは、敵である母親と同じ位の歳の人。

「……」

ビクビクとしながらも頭を下げる私を見て、シュリルの表情が華やいだ。上気して赤くなった頬を、彼女は恥ずかしそうに俯いて隠す。

（きれいな人）

シュリルに対する私の第一印象は、まさにそれだった。

「ムギナ様、この方はまさに神運の子ですわ！」
「そうだな。」

しかし、それを陛下がちゃんとご理解下さるかどうか……

何せ、あの方は常に美女ばかりを相手なさって来たのだからな」
「もし陛下が打ち捨てられるとおっしゃるなら、私は何としても陛下を許しませんわ！」

目の前で繰り広げられる会話に追いつけない私。

元々、義務教育しか受けられなかった私は頭が悪い。

「とにかく時間を置くべきだろう」

「ええ・・私もそれが一番だと思います」

二人の話が纏まったのか、シュリルがゆっくりとこちらへ近付いて来る。

「御名をお聞きしても宜しいでしょうか？」

「^{ゆき}雪」

「ユキ様ですね！これからご用の際は何なりと、このシュリルに言い付け下さいまし！」

本当に小さな声で言ったのに、聞き取られてしまった。シュリルは嬉しそうに笑う。

（なんで笑うの？）

意味が分からなかった。

「大変です、ムギナ様っ！」

そう言つて駆け込んで来たのは、若い男。

「落ち着け。一体何をそんなに慌てている？
ちゃんと陛下に報告はしたのだから？」

血の引ききつた顔の男に、ムギナが態とゆつくりとした口調で問い掛けた。シュリルはそれらを何故か冷たい表情で見つめている。

ムギナに諭され、男は深く深呼吸をする。そして私に気づくと一礼をし、再びムギナに向き直った。

「陛下が今すぐお会いになりたいと」

「・・・なんとっ！」

「なんですって！」

「何やら酷く焦っている様でした」

その言葉に、今度はムギナとシュリルの顔色が悪くなる。

「そんなっ！それではもう・・・!!」

「落ち着け、シュリル。」

王も何かを感じられたのやもしれぬ。

それに賭けてみるしかない」

「もし何かあれば傷付くのはユキ様ですわ！

私、反対です！」

「シュリル！」

これは王命だ。逆らう事は許されん」

シュリルの紺色の目から涙が零れた。

やっぱり状況の分からない私は、シュリルの辛そうな顔の意味も理解出来ない。

「・・・っ!!」

私の身体が硬直するのも構わずに、シュリルは私を抱きしめた。突然で初めての感触に、思わず身体に震えが走る。

「お守り致します。

この先何があるかと、私はユキ様のお傍に居続けます。だからどうか・・・どうか」

私が居る事を忘れないで下さい。

(温かい。

この人は温かい)

「シュリル」

「分かっております。

・・・誰か、せめて神官服を」

名残惜しげに離された身体は、まだほんのりと温かく感じられた。

シュリルは、誰かから受け取った白い服を私に着せてゆく。それは彼女達が着ている物と同じだった。

大きい服が、私の身体の首から下全てをすっぽりと覆ってしまった。

シュリルに背を押され、引きずる服に足をつつかえさせながら私は歩く。前にはムギナが居た。

「ムギナ様、私はここで」

そうシュリルが言ったのは、大きな扉の前だった。

扉の両脇には槍を持つ兵が立っている。

「ああ」

シュリルの代わりにムギナが、今度は私の背に手をそえる。

いつの間にか、身体の震えは止まっていた。

「何があるうと、私達はユキ様の味方です」

そのムギナの言葉と共に、私達は歩き出す。

そうして扉は開かれた。

3 彼女の生まれた世界（後書き）

・ ・ ・ 残酷描写に引つかかる？

4 王様の判断

扉の閉じる、ガタンという音がやけに響いた。

音楽溢れる夜会において、こんなにも重い静寂はかつてない事だった。

「陛下、神運の子にございます」

低く、しかし心地好い声が辺りに届いた。ムギナ 神官の官首かんしゅである。

跪く彼の横で棒立ちになる女。それこそが王たるディレイの望みである……はずだった。

ギリリと奥歯が音を鳴らす。

膝に届くのではという程に長く艶のない黒髪。その隙間から見える青白く無表情な顔は、醜悪だった。

両瞼は紫色で腫れ上がり、その所為もあってか目は細長い。頬も痩け、まるで亡霊の様だ。

それを見た瞬間、行き場のない怒りが込み上げる。

ディレイはその怒りを、女があまりにも醜悪すぎた所為だと思った。

「馬鹿にしているのですか」

怒気を多分に含んだ声が、広間に行き渡った。

神運の子の醜悪さを口々に囁いていた貴族達は、ピタリと口をつぐむ。

これまでに無いほど王が怒っていると分かったからだ。

貴族達は固唾を飲んで、しかし何処か面白そうに、ディレイとムギナの様子を観察する。

「いえ、馬鹿にしてなどおりませぬ。

この方こそが今代、神運の子に間違いないと思います。
その証拠がこれです」

ムギナは女の左手を持ち上げ、長々とした神官服の袖をまくり上げる。

そこには紅に色づいた丸い点が四つ。まさに花の紋様だった。

「神運の子は類い稀なる美しさを兼ね備えていると聞きます。

しかし、その者は何処からどう見ても醜女ではありませんか」

ディレイの言葉に、愛妃の座を未だ狙う貴族の女達は忍び笑いを漏らす。

「私はその女を神運の子とは認めません。

まして妃など・・・その顔で図々しい。

マレー、その女を殺してしまいなさい。私を侮辱した罪は重い」

背後に居たマレーが、ディレイの横をすり抜ける。

「お待ち下さい！

この方は容姿によらず、神の選ばれし子なればっ！切り捨てるなど言語道断！

痴情のもつれから怒った王が過去に神運の子を殺め、その後国がどうなったか！ご存知でしょう！」

「・・・マレー」

マレーは剣を抜こうとした動作を止め、立ち止まる。

「ならば、ムギナ。貴方はそれをどうしろと？」

「神を敬い、妃になさいませ」

ざわりと広間が騒ぐ。

「そして辺境の地へお飛ばし下さい。

そうすれば体面は立ち、かつ以後陛下の気を煩わせる事もありま
すまい」

「・・・良いでしょう。

では明日の婚儀後、すぐにゲートへ発ちなさい」

冷たい表情でそう言つと、もう用は済んだとばかりに早々と立ち
去る王。

対して、『ゲート』という言葉聞いて興奮気味に騒ぎ出す貴族
達。

ゲートとは！陛下は妃を殺す気かの？

確かあれは国境の地。戦争が起こるやもしれぬ地に妃を送る
とは・・・

まあしかし、その気持ち、分からんでもないな。

そうそう、相手がアレでは・・・神は何をもってアレを美女と
定めたのやら。

予想通りの展開にムギナは俯き、唇を噛み締める。

それを雪は見上げ、不思議そうに首を傾げた。

身体に残る傷や過度な怯え様から、彼女が辛い日々を送ってきた事は一目瞭然だった。当然満足に食事も取れず、こんなになるまで痩せ細ってしまったのだろう。孤児院で同じような子供をたくさん見てきたムギナは、しっかりとそれを理解していた。

しかし、陛下は・・・常に完成形である美女しか見てこられなかった。

ムギナは雪を連れ、広間を後にする。

おそらく将来、雪は必ず美女となるだろう。それは彼女が神運の子として選ばれた時点で決まっていた。

「それを知った時、陛下はどうするのだろうか？」

ムギナと雪が扉を潜ると、壁際に立っていたシュリルが近付いて来る。

問う様な彼女の視線に、首を横に振るムギナ。シュリルは眉間に

皺を寄せたが、雪の視線を感じて微笑みに変える。

（・・・いや、シュリルがそれを許しはしないだろうな）

信頼出来る部下であり、目下求婚中の相手を見て、ムギナは苦い顔をする。

（いつそ、私も彼女達について行こうか）

楽しい思いつきに、ひっそりとムギナは笑った。

「おい、ディレイ。大丈夫か？」

王の執務室に着くなり、ディレイは倒れ込むように椅子へ腰掛けた。

部屋には二人しかいない為、マレーの口調は荒い。

「ああ・・・問題ない」

「しっかし、あれが神運の子ね！。
で、感じる物は何かあったか？」

「悪い冗談だ。あの顔に？有り得ないな。
何だ？気になるのか？」

「うん、ちよつとなー」

「ならお前が相手すればいい。
俺が許可しよう」

「神さんがお前につて選んだ者を、俺が？
それこそ神罰が下るさ」

ディレイの怒りは既に治まっていた。その事で彼は、自分の判断が正しかったのだと分かる。

「ま、神に呪われようが何されようが、俺はお前に従うかな」

先程までとは違う、穏やかな笑みを浮かべるディレイ。

「しっかし俺は初めて見たぞ」

「・・・何をだ？」

ディレイの空色の目が不機嫌そうに細められる。

「お前があんなに激怒している所をだよ」

「一生の事だからな」

何だそんな事が、とディレイはため息を吐く。

「なあ、ディレイ」

「何だ」

「後悔、すんなよ」

何を偉そうにと笑って返そうとしたディレイは、マレーの目を見て固まる。

「後悔すんなよ」

念を押す様に言う彼の黒目は、思いのほか真剣だった。

「なんだ、いきなり」

「……ちよつとな」

（怒るという事は、関心があるという事。
本当に分かっているのか、ディレイ？）

予想もしない結果にマレーは戸惑っていた。

闇に包まれた部屋で、一人の女がベッドに横たわっている。

「ふふふ・・・それで？」

赤い液体の入ったグラスを手の中でクルリと回す。

彼女の背後には、男が数人立っていた。彼らは一様に、紅の服を着込んでいる。

「ゲートへと送るそうです」

「ふふっあははははは！！！！」

突然の甲高い笑い声にも、男達は動じなかった。

「馬鹿な人ね。本当に馬鹿な人。

神運の意味を分かってない若造らしい判断だわ」

女はグラスを傾け、中の液体を全て飲み干す。

空になったグラスは、彼女の手の内で粉々に砕け散った。

「私も国へ帰ろうかしら？」

先を見誤ったこの国は、いずれ終わるわ。

悪いけど、私は捨て駒じゃないのよ」

「帰られますか？」

「ええ。

帰って父上に申し上げなくちゃ」

ラジェヌ国は終わりです、って。

「ふふふ、楽しみ」

その夜、一台の馬車がラジェヌ国の城を発つ。

誰にも止められる事なく、こっそりと。

4 王様の判断（後書き）

年齢設定

雪 16歳

ムギナ 39歳

シュリル 38歳

5 ゲートへ

それは歴代で最も簡素な儀式であつたと後に語られる。

あらゆる女性が誰しも一度は夢に見る婚儀。

王の婚儀はいつも、豪華に盛大に行われてきた。

まず初めに神殿での神への婚姻宣言。続いて民の前での宣言、そして最後にお披露目という名のパレード。これが通例であつた。

しかし、今代は違つた。

行われるのは、神殿での儀式のみ。貴族や民が見る事のない、閉めきつた部屋での儀式。

その異例の事態に最も戸惑っているのは、民達であつた。

パレードを見て感じる未来への安堵。それが無い。民達は揃つて不安を囁き合つた。

「この婚姻を一生のものと定め、神の名の元に生涯手を携えてゆくと誓うか」

「・・・・・・」

「誓います」

一人は黙って首肯し、そしてもう一人は諦めた様にそう言い切った。

二人のそんな様子を、儀式の進行役のムギナが心配そうに見つめる。同じようにして、警護の為に壁際に控えるマレーも二人を見守っている。

雪とディレイは共に、光沢のある群青色の式服を着ていた。

「では誓いの首輪を。」

これを付けた瞬間に、二人は縛られる事になります。

約束を違えた時はその首を、この首輪が神の力によって落とすでしょう」

二人の神官が神殿に入ってくる。

神官達はディレイと雪の傍でそれぞれ立ち止まり、抱えていた金色の箱を二人に差し出す。

ディレイは、彼らが捧げ持つ箱から首輪を取り上げる。

首輪は小さな銀輪がいくつも連なって出来ていた。宝石の類いは無いものの、その小さい銀輪の一つ一つに細かな模様が彫られている。模様は神聖文字であり、婚姻に対する誓いの句だった。

それを雪の首に付けるデイレイの顔に、婚姻に対する歡喜の表情は一切ない。

雪もまた同様に、いつもの如く無表情だった。

「これをもって、二人の婚姻を神に捧げん」

とても静かに、あくまでも冷たく儀式は終幕を迎えた。

群青は内に持つ光を瞬かせ、二人を見つめ続ける。

婚姻の儀が終わり、明けて朝早く。

城の前には一台の馬車があった。その馬車には二頭の馬が繋がれ

ている。

「ムギナも共に行くのですか？」

ディレイの問いに、馬車を前にして和やかな表情でムギナは頷く。

「私は神の意に従います。」

神がこの地に遣わされたあの方の成長を、私は見てみたいのです。

「
そうですか」

シュリルと一緒に歩いて来た雪を見て、ムギナは微笑んだ。

彼らの立つ城門に優しく風が吹く。

ムギナは馬車の御者席に座り、馬車にはシュリルと雪が乗り込んだ。
だ。

三人共、村人が着る様な粗布の服を着ている。盗賊に狙われない
ようにする為、馬車も使い古されたものだった。

「では行つてまいります。」

陛下、どうかお健やかに」

「ああ。達者で」

そんな短い言葉を最後に、馬車はゆるゆると出発した。

まるで血が染み込んだかのようなダークレッド。

赤々とした壁面を持つその城は、周囲を威圧するようにしていた。

城の謁見の場に、今一人の老齡の男が剣を片手に立っている。

彼の持つ剣からは、ぽたりぽたりと血が流れ落ち続けていた。

男が突然入口の方へと半身を捻る。

「ほお？一日にしてここに来るとは、えらく急いだものだな」

男の視線の先には、今まさに部屋へと踏み入ろうとする女の姿が

あつた。

男と女の間で、視線が交わされる。

「お久しぶりですわね、父上？」

あまりにも後宮暮らしが身に合わないものですから、帰ってきてしまいました」

「かなり気ままに過ごしている、と聞いていたが？」

「ええ、勿論それなりに楽しく。」

「そういう父上こそ、つい先程まで遊んでいたのでしょうか？ソレで」

床に横たわる物言わぬ骸を指す女。

「嗜虐趣味は今も変わらぬようで」

「ああ、コレは違う。使えなくなった駒だ。

・・・で？

戻ってきたという事は何かあるんだろう？」

男は剣を振って血を落とす、鞘へと仕舞う。その一連の動きは、剣に慣れている事を示していた。

「ラジエ又は盾を手放しましたわ」

女の言葉にピクリと男が身体を揺らす。

「本当か？！」

その歳に似合わぬ、純粋な光が彼の目に宿る。子供のように無邪気で無鉄砲で・・・しかしそれが故に恐ろしい。

「しばし機を待てば、確実にラジエ又は終わるか・
その歴史に似合わん、あつけない終焉だな。

何故手放した？」

「容姿の問題ですわ。

王家一族の執念は、存在の重要性をも無視させる程に強い」
「確か、神運の子は必ず美を備えているのではなかったか」

腑に落ちないといった表情で、王座への階段を上る男。

「今回は違ったのでしょうか。

直接見た訳ではありませんが、闇に聞いた限りでは相当の醜さだったとか・・・」

闇

それが指すものは、女の抱える間諜である。

王座に腰掛けた男が声を立てて笑う。

「面白い。一度見てみたいものだ」

「ええ、本当に」

「・・・一日の強行軍だったのだ。疲れただろう？

ゆるりと休め」

「はい、父上」

頭を下げ、女は赤い絨毯を目に微笑した。

（父上が他人を労るなど・・・相当に興味をそそられておられるようですわね）

「ユキ様」

王城を出発してからずっと、雪は外を眺め続けている。何か興味の引かれるものがあつたのか、王都を出ても見続けている。

だが、それに対する喜びや怒りといった感情が雪には見られない。

同乗するシュリルは不安を覚え、雪の名を呼んだ。

（婚姻だってユキ様の意思関係なく進めてしまいましたし……きつと怒っておられるのでしょうかね）

シュリルの声に身体をビクリと震わせ、雪は彼女の方へと上半身を捻った。

「婚姻の件を・・・怒っておられますか？」
「・・・・・・・・」

恐る恐る問うも、ただ沈黙が返る。変色して腫れた瞼の所為で、目から感情を読むこともできない。

もちろん、言うまでもなく、表情も無い。

シュリルはもどかしく思った。

（これ以上お聞きしても、きつと何も答えては下さらないのだわ）
シュリルはため息をついて諦め、雪の見つめていた窓に視線を送る。

「・・・・これから向かうのは、ゲートという国境の街です。
流石に城のあるラシェンには及びませんが、それなりに活気のある街。それに・・・・ニシーノ国との境に建つ砦には、きつと驚かれますわ」

シュリルが語る言葉を聞く雪。彼女は窓の外を見る。

道脇の青々とした木が、流れてゆく。

「あ、いい事を思い出しましたわっ！

ユキ様、これを差し上げます」

突然の声にシュリルを見れば、何かを手に乗せてこちらに差し出している。

彼女の手にあるのは腕輪。

丸い、親指の先ほどもある群青色の石が細い金の鎖に付いている。

（はじめに見た天井と同じ色の石・・・）

「それは天軀石^{てんくせき}という石ですわ。

神の愛した庭にしかない花の、花びらから零れる朝露が地に落ち、石になるのです」

じっと石を見つめる雪に、シュリルは説明する。

「宝石としての価値もありますけど、身を護る聖石として贈るのが普通でしょうか」

そこで一度言葉を切り、そして真剣な顔でシュリルは雪を見る。

「ですから、ユキ様に付けていて欲しいのです。

神に愛されるユキ様ならば、きっと聖石の加護も強力に違いありません！」

力説するシュリルに、雪は首を傾げる。

「・・・まもる？」

鈴の音の様に可憐な声が聞こえた。

シュリルは、それが誰の声なのか一瞬分からなかった。

「え、ええ！お守りくださいます！
きつと！！」

（お名前を聞いて以来、ようやくお声を耳に・・・）

シュリルは涙を流しながら笑う。

6 忘れられた妃

背の高い、上の方だけに葉を繁らせたキノコ状の木。

それが森に生える木々の特徴である。

葉は日を遮り、昼でも森の中は薄暗い。

そんな木々の間を縫うようにして、一人の女が歩いていた。

黒色のワンピースの裾が膝で、ポニーテールにした黒髪が腰で揺れる。細い身体に乗る顔は小さく、現実感に乏しくなるほど美しい枝の上を走る小動物を追いかける目は、澄んだ琥珀色をしていた。

彼女の胸元には銀の鎖が、左腕には大粒の天軀石を通した金の鎖がある。

「ユキーーっ！」

名前を呼ぶ声に、女が振り向く。その顔は完全な無表情でありながら、やはり美しい。

「ユキ！俺を置いて行っちゃダメだって、いつも言ってるでしょー？！」

駆けて来た青年の顔は拗ねていた。

しかし、対する女は首を傾げるだけ。

そう、彼女こそ雪だった。

王城を去ってから早くも三年が経ち、雪は十九歳になっていた。

醜悪だと冷笑された容姿は影も形も無くなり、まさに神運の子といえるものへと変貌を遂げた。

その変化に対して、やはり時と共に変わらぬものもあつた。『表情』と『言葉の少なさ』である。

「だーかーらー！

一人じゃ危険だつて言つてんの！

なんで分かんないかなあ・・・シュリルに怒られるのもうヤダからね！」

大剣を背負つて立つ青年が、頬を膨らませる。

彼の名はリゾン。

もっさりとした茶色の髪に、クルリとした赤目。顔だけ見れば、完全な女性だ。が、身体を覆う引き締まった筋肉と長身が彼を男だと主張する。

「分かったあ？怒られんの、俺なんだかね！」

あああでも、やっぱ可愛いなあ・・・思わず許したくなるうー！」

・・・中身は変態だが、一応雪の専属の護衛だったりする。雪は一度誘拐されかけた事があり、それに危機感を抱いたムギナが雇ったのだ。雇われる前は傭兵だったらしい。

腕は確かなのだろうが、変態性ゆえにシュリルからは随分と毛嫌いされているようだ。

「で？今日はどこ行くつもり？」

また泉？」

泉。それが指すのは、森の中の大きな池である。澄み渡った水を求めて、森に住む多くの獣たちが立ち寄る場所でもある。

雪は首を縦に振った。

「そ、じゃあ俺もついてく」

（仕事だから・・・）

一人で行きたい気持ちを抑え、雪は仕方なく頷いた。

「ホント、好きだよねえ。」

俺からしたら、ただの泉なんだけど」

（人じゃないから、動物とか泉は好き）

「だいたい泉なんて、見るもんじゃないって。どこの貴族だったの。あれは緊急時の水飲み場。もしくは洗濯場か水浴び場―」

傭兵時代に何度か、泉でそうした経験があったのだろう。リゾンは雪の後ろを歩きながら話す。

（きれいなものにな・・・）

「・・・っていうか、俺無視されてる?!」

しっかりと聞いて考えてはいるのだが、雪の心の声はリゾンには聞こえない。

二人の会話は常に一方通行だった。

嘆くリゾンを尻目に、雪は見えてきた泉に心の中で歓喜する。

木々がいきなり途切れ、ひょうたん型の泉が広がる。澄んだ水は空を、木を写す。反対側の水際には四足動物が集っている。

（やっぱりここは落ち着く）

空を流れる雲を見上げ、雪はゆったりと流れる時間に身を浸す。

せわしなく動く者の居ない、外界から隔絶されたこの空間が雪は好きだった。

現実逃避を開始した雪の横でリゾンは腰を降ろす。

いつもは雪に話し掛けてばかりいるリゾンも、この時は黙り込む。
否、話し掛けられないのだ。

うつとりと景色を眺める雪は、まるで泉に降り立つ妖精の様に美しかった。

（神秘的ってのは、たぶんユキの事を言うんだろなー）

普通の庶民なら気にもとめない物に喜ぶ。リゾンはそんな主が案外好きだった。

そう、命を掛けて護る主と認めても良い程までに。

泉のほとりに立つ二人を、ほんわかとした空気が包んでいた。

「お帰りなさいませ」

こちらに向かって歩いて来る雪を見つけ、シュリルは口元を緩めた。

彼女が立っているのは、木造の家の前。木の温もりが感じられる家だが、造り自体は庶民の家と変わらない。広さにしろ、少しだけ大きいかな？というくらい。

王妃が住む物としては粗末すぎる家だが、これがムギナとシュリルの精一杯だった。

そもそも彼らは営利を目的としない教会で働いていたのだ。貢献料という名の給料は、庶民の稼ぎを少し上回る程度しかなかった。

本当ならば傭兵を雇う金もないのだが・・・そこはリゾンの好意で、衣食住の提供が彼の給料代わりとなっていた。

「今日も泉に？」

こくりと頷く雪。それを見て、シュリルは笑みを深めた。

が、雪の背後に立つリゾンを見た途端、彼女の空気が凍る。

「今日はちゃんと護衛してたって！なあ、ユキ？」

「嘘おっしやい！途中から慌てて追いかけていたのを、私はこの目でしっかりと見ましたわっ！」

「うわー見られてたのかぁ」

「ユキ様がさらわれでもしたら、どうなさるおつもりです?！」

「いやいや、俺に気配を読ませず立ち去るユキがダメなんだって――」

「貴方という人はっ！自分の怠慢をユキ様の所為になさると?！」

あー言えばこー言う、終わらない応酬に雪は小さく息を吐いた。

まだ言い合いを続ける二人を放って、雪は戸口に立って家の中を見渡す。

(ムギナ・・・いない)

雪は首を傾げた。

「どうしました、ユキ様?」

ようやく言い合いを終えたのか、シュリルが雪に近づく。彼女の後ろでは、リゾンが荒い呼吸を繰り返している。

どうやら、肺活量ではシュリルに敵わなかったらしい。

「もしかしてムギナをお探でしたか?」

再び首肯する雪。

「あの方なら今、おそらく孤児院におりますわ」

何処かスッキリとした笑顔でシュリルが言う。それを恨めしげに見つめるリゾン。

「孤児院は、親を失った子供を育てる場所の事です。

ユキ様が行きたいと願うのなら、ムギナが案内しますわ」

シュリルの言葉のほとんどが、雪の耳を素通りした。

（親がいない・・・）

親の居ない子供の気持ちが雪には分からなかった。

（うれしい？・・・かなしい？）

三年前の記憶を掘り返してみる。

実の親に殺されそうになり、死が迫る間に異なる世界へと飛ばされた雪。

シュリルに抱きしめられた時、何を思ったか？

（うれしい）

ようやく解放されるのだという喜びを、あの時確かに雪は感じていた。

（私と同じ、親のいない子）

それならば何か共感できるのではないか？

雪はシュリルを見上げる。

「
行っ
て
み
た
い
」

7 孤児院<前編>

白い木は、普通の茶色の木より価値が高い。これは一般常識として広く知られている。

その理由は様々で、『見た目がいい』とか『丈夫で耐久性がある』とかいった理由が一般的だ。

そんな木で、なだらかな丘に建つ孤児院はできていた。

孤児院の周囲には草原が広がり、丘の下に広がるゲートの町並みを眺める事ができる。

ムギナに連れられ、雪がそこを訪れた時はちょうど昼だった。

昼ご飯はもう食べたのだろう。子供達の草原を駆け回って遊んでいる姿が見えた。

「ユキ様とお会いする前に一度、ここを訪れた事があるのですよ」

微笑んで見つめるムギナの視線の先には、子供達がいる。

「その時はまだ、この場所に子供は一人も居ませんでした。

先日来た時に子供の姿を初めて見て、感動しました。この孤児院はちゃんと必要とされているのだと・・・思わず泣いてしまった」

口元到人差し指を立て、内緒ですよとムギナが言う。

「昨日聞きそびれてしまいました。が、何故ユキ様は孤児院に来たいと？」

「・・・知りたかった」

「孤児院を？」

首を横に振る雪。

「きもち」

「気持ち・・・ですか」

これまで雪は、泉に行く時以外で自主的に動く事がなかった。

食事や着替えといった生活の基本ですら、放って置くとやらなかった。最初の頃にシュリルがよく絶叫していたのを、ムギナは今でも覚えている。

何故叫ぶのか分からないといった顔で立つ雪は、まるで赤子のようだった。

（いつの間にか、成長されていたようだ）

雪が他人を気にしはじめた事が、ムギナは嬉しかった。

「そうですか・・・では、話しかけてみるといいでしょう。人見知りの少ない子達ばかりです。きっと、すぐに仲良くなれますよ」

笑みを深めるムギナを、不思議そうに雪は見上げた。

孤児院を玄関から出た女が、二人を見て声を上げるのが聞こえる。

女は洗濯物を入れた籠を抱えていた。何故か慌てて二人へと駆け寄ってくる。

「む、ムギナ様っ！

先日はすみませんでした。何の用意もしておらず、十分な歓迎も出来ませんで」

「いえ、こちらこそ昨日急に來てしまつて、すまなかつたね」

へこへこと頭を下げる女を、ムギナは穏やかに止める。

そして、お辞儀を止めた女は雪の存在に気がつく。

「こ、こちらの方は？！

もしかや高貴な……？」

雪の顔立ちを見て、真っ青になる女。

「まあちよつと、お忍びでね。

ああ、そう緊張しなくともいい。

ユキ様はそんな御方ではない」

雪は、木の棒で遊ぶ子供の様子をじっと見つめている。

「ユキ様、今日はリゾンはおりません。

ですから、絶対に私の見える範囲に居てくださいね」

雪は頷き、ムギナ達から離れ、子供達の方へと向かう。

「あの・・・？」

「危険はないから安心なさい。」

少し・・・そう、少しだけでいい。話をさせてあげて欲しい」

「あの方のあの表情・・・もしかしてあの方も？」

「すまないが、私も詳しい事は知らない。」

あの通り、非常に無口な方だから」

ムギナと女は、雪を見つめる。ムギナは何処か嬉しげに、女は不安げに。

少し離れた場所でボーッと見つめる雪の姿に最初に気がついたのは、五歳ほどの少女だった。

「おねーちゃん、だあれ？」

いつの間にか隣に居た少女を見下ろし、雪は彼女と同じく首を傾げる。

少女は、ぱちくりとした翠の目を雪に向けていた。肩ほどにある

茶髪を緑色のリボンで結い上げた彼女の姿は、とても愛らしい。

二人して首を傾げ合っていると、少女の頭に誰かの手が乗った。

「なーにとんねや、ルリア？」

手は、金茶色の髪の少年のものだった。

変な発音で話す少年は、紺色の目を雪に向ける。

「さつきムギナ様とおった奴やんな？」

綺麗な奴やなって思っと思ったんや。名前は何や？」

牙のようにも見える八重歯を見せて、少年はニカッと笑う。

「雪」

「ユキか！よろしくな！」

俺はザツキ、このちまいのはルリアつつーねん！」

こくりと頷く雪。

「おねーちゃんって、ムギナさまのことも？」

「おい、ルリア！」

雪は首を横に振った。

「ごめん、悪い事聞いたな。」

ルリアはまだここに来て日が浅いんや。許したって。

・でも親やないって事は、新しくここに入る子って事か？」

またも雪は首を横に振る。

「・・・じゃあ何でこんな所に？冷やかしかっやうやるな？」

ムツとした顔で聞くザツキに、雪は首を傾げた。

「聞きたいことがあった」

「・・・何や？」

ルリアを背後にかばい、ザツキは雪を警戒する。

「うれしい？」

「何が？」

「親がいなくなつて」

（何言つとんねん、コイツ！！）

雪の言葉に、カツと頭に血が上った。

「嬉しいわけないやろっ！お前、頭おかしいんとちゃうか？」

雪はザツキの背中から顔を出すルリアに視線を送る。

ザツキのただならぬ雰囲気を感じ取ったのか、琥珀色の目と目が合うなりビクリと身体を揺らす。

「・・・うれしい？」

「このっ！いい加減にせえ！！」

バシッという音が辺りに響き渡った。

手を振り下げた状態のまま、ザツキは目を怒りで歪ませる。

「俺らは好きで孤児になったんやない！」

ここに住む奴らの中には、親を目の前で殺された奴やつておるんやっ！

うれしい訳あらへんやろ？！」

そこまで怒鳴って、ザツキはやつと我に返る。

雪の表情や空気が恐ろしいまでに冷たくなっていたからだ。それまでは感情が見え隠れしていた目も、今や人形のようなようだ。

片頬を赤く腫れさせた雪は、じりじりとザツキから後ずさる。彼女の足は目に見えて震えていた。

「ユキ様っ？！どうなさったのです！」

「ザツキ！貴方何したの？」

そこに駆け込んでくるムギナと女。

二人は雪の頬を見て大体の事情を察したらしい。

女がザツキを責めるような目で見る。

「だ、だってソイツがっ！！」

「だからって何故手を出すの！」

女とザツキの言い合いで、ルリアが泣き出す。

ムギナは雪の前に跪き、彼女に必死で話しかける。

「ユキ様？・・・ユキ様！こっちを見てください！ユキ様！」

いくら呼びかけても、雪の目は虚空をさ迷うだけ。

いつそのこと、肩を掴んで揺らしたかったが、ムギナはそれが出来ない知っている。

「私の目を見て下さい、ユキ様」

（私は貴女を傷つけない！）

「ユキ様！・・・！」

雪の目が僅かに動く。

（今だっ）

「ユキ様！私の目を・・・！」

ゆるゆると雪の顔が上がる。

ムギナの翠の目と雪の琥珀の目とが交差した。

瞬きと共に、雪の左目から涙が一滴こぼれ落ちる。

ムギナはそれに息を飲んだ。

「ユ・・・キ・・・様？」

「わからない」

「・・・・・・何がですか？」

「ぜんぶ」

雪の顔が、いつもの無表情に戻ってゆく。

「ユキ様・・・」

「私には分からない」

これ以上何も聞きたくないと両耳を手で覆う雪。

それは彼女の拒絶だった。

（また他人との間に壁を作ってしまったわれるのか・・・）

草原にしゃがみ込む雪を見て、ムギナは悲しげに目を伏せる。

「・・・あの、ムギナ様」

「俺は絶対に謝らんで」

「ザッキ！」

「だってソイツが悪いんや。無神経な事聞いてくるし」

雪から顔を背け、ザッキはぶつぶつと文句を言い続ける。

ムギナはザツキの前にしゃがんで、彼と視線を合わせた。

「明日またここに来た時、私に詳細を話してくれるかい？
いいですよ、ハミリイ？」

「え、ええ。勿論です、ムギナ様」

女はザツキの背に手をそえ、勢いよく頷く。

8 孤児院＜後編＞

使い込まれた、しかしまだ使えそうな黒いテーブルを囲って四人は向かい合う。

「そんな事をおっしゃったのですか・・・」

ムギナは眉間に深く皺を刻んだ。

「俺は絶対に謝らんで」

「ザッキ。貴方は何て強情なの！」

少しは自分の行動を見直しなさい」

女 ハミリイが厳しい声を上げる。

ハミリイは元神官だった。神殿から孤児院へ派遣され、今ではゲートの孤児院の院長をしている。

歳を経たふくよかな身体、日々奮闘しているからだろっ艶のない亜麻色の髪。いつも慈愛がこもっているはずの目は、今やつり上がっている。

「だって俺ホンマに悲しかったん。

父さんと母さんが冷たくなって・・・それなのに！あんな事言われて腹立たん奴が何処におんねや！」

ガンツとその小さな拳を叩きつけ、ザッキは唇を噛む。

「・・・嬉しいとか、俺らと同じ状況になった事ないから言えるんや」

「ザツキおにーちゃん」

ハミリイとザツキとの間に座るルリアが不安そうな声を上げた。

「・・・嬉しい、か。」

嬉しいと思える事情が、ユキ様にはあったのでしょね」

「まさかつー!!」

ハミリイは口を両手で覆い、顔を青ざめさせる。

「少し考えれば分かる。」

誰かが触れる事への過敏な反応。それに今回の言葉。おそらくユキ様は・・・」

（なんとという酷い事を・・・。

彼女に足りないのは言葉でも経験でもなかった。

彼女に必要なのは、愛だ）

ムギナは自分を嘲笑う。

（愛を与える・・・私たち神官の最も得意とする事じゃないか。
そんな事にさえ気づけないとは・・・私は神官失格だな）

「どついう事や？」

押し黙るムギナとハミリイに苛立ち、ザツキの紺色の目が細まる。

「怒る前にまず、貴方はユキ様の事を知らなければならぬ」

ムギナは苦笑を浮かべ、ザツキに答えた。

（ザツキだけではない……私も、何も知らない）

二年という時があったのに、知ろつとしなかった自分。雪の心の壁を言い訳にして、一度も彼女に聞こうとしなかった。

（これほど苦い気持ちになったのは、いつ以来だろうか？）

黒髪が風で舞い上がり、落ちる。

舞い上がり、落ちる。

座って、それをボーツと見つめるリゾン。

これはいつも泉のほとりで繰り返される光景だ。

（なーにが起きてんのかねー？）

昨日、ムギナと共に帰ってきた雪。その時の彼女は、生死の境に

足を踏み入れた事のあるリゾンでさえゾツとするほど無表情だった。

（朝からムギナは出かけちゃうしー？ユキはユキでずっとあんな感じだしー）

見上げる空が紅に染まっている。来た時が朝だった事を思い、リゾンはため息を吐いた。

「……………」

ずっと泉を眺め続けていた雪が、突然リゾンを振り返る。

「なあに？」

トコトコと定位置を離れ、首を傾げるリゾンの傍に雪は座った。

「ねえ、何があったのさー？」

問い掛けるリゾンを雪は見上げる。

何かの感情が雪の目をよぎった。

「……………うれしい？」

いつも無視される会話に慣れていた所為で、返事に戸惑いながらも興奮するリゾン。

「何が？」

「親がいないこと」

リゾンの中の興奮が、ピシッと固まった。

（平常心、平常心）

「何でそう思うの？」

雪は視線をそらし、泉を見つめる。

（ありやりや・・・これは答えてくれそうにないねー）

リゾンも泉に顔を向けた。

「そう思ったから」

予想もしないタイミングの答えに顔を向ければ、泉を見つめたままの雪がいた。

「思ったの？」

頷く雪。

「親って、なに？」

「親、ねえ。」

無条件で子供を愛し守る者・・・ってよく言うよねー」

「愛って、なに？」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「……ユキ」

雪はリゾンの方へ目を向ける。

リゾンの顔にいつもの悪戯っ子のような表情はなく、ムギナと同じ穏やかさがある。

「ねえ、ユキ。

俺の膝に座ってみない？」

(ひざ……)

雪は首を傾げ、草の上で組まれているリゾンの足を見る。

(ひざ……?)

座る自分を想像して、リゾンに背中を向けるのだと思い至る。

「怖い事なあって何にもしないよ？」

ほらおいで、と膝を叩く。

(こわいこと、しない)

ちらりと、頭の中に敵の姿が現れる。

目を閉じて、その姿を心の奥へしまい込む。

じりじりと何かを確かめるようにして近づく雪。

急かす事もなく、膝を叩いてリゾンは待つ。

「おいで」

リゾンの膝に重みが掛かる。

風にあおられた雪の黒髪が、リゾンの顔をくすぐった。

体と体を密着させるように雪の身体に腕が回され、引き寄せられる。ビクリと彼女が揺れた。

「どんな感じ？」

（あったかい・・・）

「温かいでしょー」

雪の頭が動くのを感じて、リゾンは微笑む。

「こーやって人に抱きしめられてると、心が穏やかにならない？」

（おだやか？）

「時間の流れがゆっくり感じるーとか。ずーっと、こんな時間が続けばいいのにーみたいな」

雪は、泉を見る。

いつも泉を見ている時は、思っているより早く時間が流れていた。

「たぶんそう感じた時を、幸せって言うんじゃない？」

（しあわせ・・・）

「愛って、たぶん幸せを知ってからじゃないと分からないよ。
・・・ユキは今、幸せ？」

キラキラと太陽の光を反射して、泉の水面が輝く。

何度も見たいと足を運んでしまう泉。

薄暗い森の木々の間を必死で歩いて、ようやく見える泉。

木々の隙間から泉が見えた時、雪はいつも
・・・

「うれしいは、しあわせ？」

「とてもよく似てるよ。俺は哲学者じゃないから、詳しくは知らないけどね。」

でも、喜びと幸せは同じって考えてもいいんじゃない？」

（うれしいは、しあわせ）

その瞬間、リゾンは息を飲む。

雪の顔が少しだけ和らいだのだ。

完全な笑顔とは到底呼べない。・・・が、それは確かに雪の成長と言えた。

「ユキは幸せ？」

「しあわせ」

「ならその内に気づくよ。愛ってこういう事なんだって」

（家族なら、俺はたぶん優しいお兄ちゃんって奴だろうなあ）

リゾンは愛しさを感じていた。

8 孤児院く後編> (後書き)

シュリルがもし泉にいたら、リゾンの膝に座ろつとする雪をきつ
と全力で止めていたはず・・

9 戦禍

（何故？何故ですの！・・・ユキ様っ）

夕方、家の外で洗濯物を取り込んでいたシュリルは激怒した。

孤児院に行つてから様子がおかしくなってしまうていた雪を、彼女はずっと気にかけていた。

だから朝、雪がリゾンを連れて泉へと向かおうとするのを、当然引き止めたかった。

実際にそれを行動に移さなかったのは、あの場所が雪にとって大切だと分かっていたからだ。

（それなのに・・・あの野獣め！）

泉から帰った雪は何があったのか、リゾンと手を繋いで帰ってきた。

以前よりも柔らかい表情に安堵もしたが、それ以上にリゾンが憎かった。

（一体何をどうしたら、気安くユキ様に触れるの！）

私はまだ髪を梳く事さえ、させてもらってないのに。
あんな事やこんな事、私だっただけなの。不公平よ！

腰に巻いたエプロンをぐぐつと握り締め、シュリルは居間でくつろぐリゾンを睨む。

（何よりも許せないのは、料理の準備をする私を差し置いて！
雇われ傭兵ごときが！
ユキ様を膝に乗せている事よ！）

まな板に転がる野菜を憎きリゾンに見立て、包丁を振り下ろすシュリル。

包丁はいつも以上の切れ味を発揮し、一振り毎にまな板に線を刻んでゆく。

（ふふふ・・・覚えてなさい。

私を怒らせると怖いのか？

こうなったら・・・今庶民家庭で流行っているというアレの出番ね。
雑巾の絞り汁入りのお茶とかいうアレよ）

不気味な笑い声を出しながら料理するシュリルの姿に、リゾンの背中が栗立つ。

家の中に薄い殺気が満ちた頃、玄関で音がした。

台所から出たシュリルが玄関へ向かう。

「お帰りなさいませ、ムギナ様」

「ただいま帰りました。」

「・・何度聞いても、夫婦みたいでいいですよ。ね。いつそ本当にしてしまふというのは、どうでしょう？」

「お、お断り致しますわ」

目を泳がせて、対応するシュリル。

「満更でもなさそおー」

「じよ、冗談じゃないですわっ」

シュリルがむっとりとした表情で台所へ戻っていく。

それをニヤニヤと笑ってリゾンは見つめる。

「素直にならないと損するよおー？」

「何を分かった事をつ」

「・・とりあえずシュリルとリゾン、続きは外でしてくれないかな？」

「何でえ？」

「彼が、ユキ様と話したいらしくてね」

怪訝そうに片眉を上げ、リゾンとシュリルは玄関を見る。

ムギナが壁脇に寄れば、その後ろから金茶色の髪の少年が現れた。

二人の視線に気付き、少年は目を揺らがせる。

「だあれっかな？」

「孤児院で暮らしていてね、名はザツキと言っんだ」
「ふうん」

リゾンは唇の片端を意地悪そうに上げ、雪を見る。

雪はリゾンに抱きついていた。手が白くなるほど強く、彼の服を掴んでいる。

（もしかして、ユキがおかしかった元凶かな？）

「それでも護衛だからね。」

俺だけでも傍に居たいな―」

雪の頭を撫でる。

彼女は俯いたまま動かない。

「ユキ様が怪我をなさってはいけません。私もあの方の意見に賛成です」

小刻みに震える雪を見て、シュリルが一も二もなくリゾンを援護する。

（怯えるユキ様を放って出るなんて私には絶対できないし、したくもないわ）

「二人の気持ちは分かる。でも、これはユキ様とザツキの問題なんだよ。」

それに、誰か居ては思い切った話など無理でしょう?」

「それはそうですが・・・もしユキ様に何かあつたら・・・」

シュリルは恨めしげにムギナを見上げる。

「君に嫌われる事になつても、譲るつもりはないよ」

ムギナの翠の目とシュリルの紺の目とが互いに見つめ合った。

やがてシュリルの目が逸らされる。

彼女は、リゾンの胸元へと顔を埋める雪に深々と腰を折った。

「ユキ様・・・申し訳ございません。」

後ほど、如何様にも罰は承ります」

「えー何でそうくるかなあ。俺残るー」

「雇われ傭兵ごときの意見を誰が聞くと?」

さあ、ユキ様を解放して、貴方も外に出るのです」

ぎゅつと服を握る手を、雪は緩めた。

「何かあつたら俺の名前、呼べる?」

頷く雪の頭を撫で、リゾン達は家を出た。

家から出た途端、リゾンは真剣な表情になる。

「何故急に意見を変えた？」

ユキが怖がっている事は、あの震えようで分かるだろーに」

シュリルは彼の責める目を逸らすことなく受け止めた。

「私は、神官としてのムギナ様を信用していますわ」

（ムギナの考えは当たるってかあ？

逆の結果が出たらどーすんだよ）

舌打ちをしたリゾンは、家に背を向け歩き出す。

「見回り行ってくる」

家の中に気まずい空気が流れる。 外見のみすばらしさからは考えられない程、内装は住みやすく整えられていた。

床に敷かれた絨毯。 庶民にとっては憧れのソファー。

（やっぱりムギナ様って言われるだけあるわな）

部屋を見回した後で、ザツキはようやく雪を見る。

雪は、ソファの上で膝を抱え俯いていた。顔を上げて話そうという素振りなど全く感じられない。

（・・・くそっ！俺やってお前と話したくなんかないわ！）

ザツキは荒々しい足音を立てながら、雪の斜め右にあるソファへ向かう。そこに座ったザツキは、雪の頭部を睨みつけた。

「最初に言っとくわ。

俺はまだお前を許してなんかおらん。

ムギナ様と院長に言われて来ただけや。勘違いすんな」

雪は微動だにしない。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・これはムギナ様に言われたから聞くんやけど、何であんな事言った？」

「・・・・・・・・」

雪はやはり動かない。

一方通行な会話は続く。

「ぶ・・・ぶつた事は謝るっ！でも、あれはホンマに酷い言葉やった！」

「・・・・・・・・いの？」

「？」

姿勢はそのまま、雪が呟く。

「死んで、うれしくないの？」

（またコイツはっ）

怒りの衝動でソファから立ち上がるザッキ。眉間に皺を寄せ、拳を握りしめる。

（殴りたい！・・・でも二の舞になるんはゴメンや）

「くそっ」

悪態をつきながらではあるが、彼は再び腰を落とした。

「俺はっ・・・俺はゲートで生まれ育ったんや。家族は両親と俺の三人。」

裕福ではなかったけど、めっちゃ楽しかった。

でも前の王妃様が亡くなってすぐ、隣のニシーノ国と戦争になった」

頂垂れたザツキの紺の目が、濃く陰る。

「戦争の始まりは突然。密かに内側に入り込んでた敵兵が、街に火をつけたんや。」

時間は真夜中。

俺は、焦げ臭さに気づいて飛び起きた。火から逃げようと外へでたら、そこに・・・っ!!」

ぼたりと彼の目から涙が落ちる。

「父さんも、母さんも敵兵に・・・!」

滝のように流れる涙が頬を濡らす。

「それでっ」

そう言った瞬間、突然ザツキの頭に重みが掛かる。

見上げれば、雪がザツキの頭を撫でている。

「ぐずっ・・・何しとんねん」

雪は無表情のまま、首を傾げる。よしよしと動く手は止まらない。

「手、何しとんねん」

「・・・よかったね」

「何がやっ！また親が死んでとか言つつもりか？」

雪は首を横に振る。

「生きてて」

「良くないわ！」

「こんな・・・こんな思いする位ならいつそ・・・っ」

「もえたかった？」

「んな訳あらへんやろ！」

「じゃあ、良かったね」

ザッキは言葉を失う。

（ひどい言葉や・・・でも、ホンマの事）

人間誰しも自分を中心に考える。

それは、卑しい人間の本能。

（あの時死んでしまえば良かったと思う。・・・でも、やっぱり死ぬのは怖い）

ゆっくりと優しく撫でられる。

「死ぬのは怖いんや・・・」

鼻をすすって、弱々しく言う。

「生きて、うれしい？」

「・・・微妙」

「今しあわせ？」

ザツキはリアラを思い浮かべる。

「義妹も出来たし、そこは文句ないわ」

笑う彼の目から、再び涙が流れた。

9 戦禍（後書き）

遅くなり、申し訳ありません。

謝罪と言いつは活動報告にて・
宜しければ、ご覧下さいませ。

10 夢が見せる幻（前書き）

納得がいつてません・・
後ほど編集する予定です。

10 夢が見せる幻

首を傾げながら、手の平を眺める。

（なんで）

さっきまであったはずの恐怖が、いつの間にか無くなっていた。

（・・・・・・敵）

殴られたのだから、少なくとも味方ではない。

（なんで？）

撫でたのは、何故？

「おい、何ぼさつとしとんねん」

ソファアに座ったザツキが雪を見上げる。泣いた所為か、目が赤く潤んでいた。

「俺の事は分かったやろ。やから、次はお前の番」

雪の瞳がゆらりと揺れる。

「俺にとつての両親は、帰る場所やった。

・・・お前にとつて、親はどういう存在や？」

嘘は許さないとザツキが見る。

(親・・・)

『哀れな子』

敵の言葉が雪の脳裏に甦る。

忘れかけてた声が雪の感情を凍らせていく。

あの時のあの言葉で、愛してくれるかもしれないという希望が彼女の中から消えた。

『哀れな子。』

子が必ず親を愛すと思ったら大間違いよ。だって・・・ほら』

息も絶え絶えに床へ伏せ寝る雪。その首に女は緩く両手をかけて

いた。

手の冷たさに、雪は弱々しく震える。薄目を開けば、女が薄い笑みを浮かべていた。

輝く黒髪の、さぞ昔は美しかっただろうと想像できる顔の女。

『こんなにも憎らしい』

「あ、あああ・・・あ・・・」

「おい！おいって！！」

ユキっ、一体どうしたんや！」

耳を塞いでしゃがんだかと思えば、雪は突然苦しみ出した。目は見開き、顔色は真っ青に。唇は既に紫色だ。

急ぎ駆け寄ったザッキは、対処法も分からずあたふたする。

「おい！ユキ！！」

バタンッ

玄関の扉が勢いよく開く。

「何か物音がしましたわ！・・・ってユキ様？！」

シュリルが慌ただしく走る。

「あ・・・ああ・・・あ・・・」

雪を見た彼女の目から涙が落ちてゆく。

「ユキ様あ！」

耳障りな音が途切れることなく響いていた。

（・・・しるる）

目を閉じたまま、雪は両手で耳を塞ぐ。

『冷蔵庫を開けるなんて！

ここにあるのは私の食事の材料なんだ！

お前にやる物なんて無いっ』

(うるさい)

『新しい服だつて？！

何で私が用意してあげなくちゃいけないの。

学校に行かせてやってるっていうのに、本当に強欲な子』

『まるで乞食じゃないの！

ホント、お似合い』

『死ねば？』

「うるさいっ」

叫んで雪は我に返る。

目を開けば、暗闇が広がっていた。

(・・・どこ？)

奥行きの分らない暗闇に、不安と安堵を抱く。

二つの矛盾した感情は雪の身体を動かし始めた。

何かに導かれるように、ふらふらと闇をさ迷う雪。

『知ってる？義務教育は中学までなのよ。』

だから、お前は今日から私の奴隷をなさい』

一歩一歩踏み出す度に、左右から声が響く。

『ふふつ。笑える格好だね。』

さぞや学校でイジメられてるでしょうね？』

『あれを見なさい。お前はまだマシでしょう？』

世界にはあんなに困ってる子がいるんだから』

雪の目からは涙が流れていた。

（しあわせだった・・・敵と暮らしていた時よりずっと）

元の世界での日々を思い出せば思い出すほど、目から滴が落ちる。

ムギナ達との生活で感じた幸福を、雪は今まさに実感していた。

『私が手を下さずに殺せる方法は無いかしら？』

罵倒され、殴られる事の無い日々。

満腹になるまで食べられる日々。

清潔で居続けられる日々。

「私は・・・しあわせ」

『お前みたいな子が幸せになれるなんて思わないことね。
母親である私でさえ捨てるのに。お前に価値なんてない』

ズキンと胸が痛んだ。

（また捨てられたら・・・私は・・・）

またズキンと胸が痛む。

「雪、それ以上考えてはいけない」

声と共に突然、目に閃光が突き刺さる。

闇に慣れた目にそれは厳しく、雪は目が開けられない。

「雪」

穏やかな、男の声が耳にまで届く。どこかほっとする声だった。

（まぶしい・・・）

「雪、不安なら私の所へおいで。

今はまだ会えないけど、その内迎えに行くから」

「だれ？」

「迎えに行く。必ず行く。
大切に愛しい私の娘」

（む、す・・・め・・・？）

雪の身体が恐怖で固まる。

（また・・・敵？）

「敵ではないよ、雪。

予想はしていけど・・・やっぱり覚えてないか」

僅かに沈んだ声になる。

「それに彼女も、望んであなつた訳ではないんだ。
彼女は狂ってしまったんだ。私と引き裂かれてしまったから」

（かのじょ？）

「里枝^{りえ}、雪の母親の事だ。
知ってるだろう？」

目を開けるが、光の中にぼんやりと黒い影がある事しか分からない。
い。

「お父さんって呼んで欲しいな」
「・・・・・・・・」

（何で今になって）

雪の中で、整理のつけられない感情が渦巻く。

「呼んでは・・・貰えない、か。
でも必ず迎えに行くよ」

遠ざかり、見えなくなる光。

都合の良い夢。

その一言に尽きた。

証拠に、父親だという男の顔は見えなかった。

(ゆめ・・・)

『何故早くこうしなかったのかしら？

・・・ああ、でも苦しんでくれたなら意味はあったわ。ふふっ』

再び舞い戻る雑音を振り払うために、雪は意識を沈めた。

リゾンが首を軽く打ち、雪は気を失った。

彼女を運び込んだベッドの横には、シュリルが張り付いている。

「シュリル。貴女まだ食事を取ってないでしょう」

「・・・」

「シュリル」

扉に立つムギナに背を向け、シュリルは雪を見続ける。

「やはり、付いているべきでした」

「・・・シュリル」

「付いていれば、こんな事にはっ」

仰向けに横たわる雪の顔は青白い。

シュリルはそつと彼女の頭に手を伸ばす。

雪は気づいてないだろうが、毎晩こうして触れていた。いつか目

覚めている時に触れる事を信じて。

「私は母親になれると思ってたんだわ。
なれるはずもないのに」

自嘲気味に微笑むシュリル。

「・・・とすると、私は父親ですか」
「は？」

シュリルはムギナの方へ半身を捻る。

「いやあ、てつきりフラれたのだとばかり。
考えていてくれたんですねえ」

「ち、違いますわ！」

「美しい妻と娘を持てて私は幸せです」

キラキラと眩しい笑みをムギナは浮かべる。

それを見て、さらにシュリルは慌てる。

「勘違いです！

大体何でそうなるの?!」

「ふーん。無意識、ね？」

「ですから！」

もぞりとシュリルの背後で音がする。

「あ・・・」

恐る恐る見れば、雪が不思議そうな目をしていた。

ぼわっとシュリルの顔が赤くなる。

「ななな何でもないんです！

母親になりたいとか父親とか、全く関係ありませんからっ！」

慌てていたシュリルは、雪の目が一瞬陰るのを見落としてしまった。

一っ息をつき、心を落ち着かせるシュリル。

「ユキ様、夕飯はいかが致しましょう？」

11 ともだち（前書き）

短めですが、この話にて雪編終了。
次の王都編の前に修正します。
詳しくは活動報告にて

11 ともだち

皿に乗った野菜をフォークに刺す。

ぱくりと口に含めば、野菜特有の甘味と僅かな苦味とが広がる。

そして新たな野菜を突き刺し、もぐもぐ。

刺して、もぐもぐ。

刺して、もぐもぐ……

口を動かしながら、雪は皿から視線を上げる。

「すっげー幸せオーラ出して食べるんやな」

紺色の目がテーブルの向かい側で呆れている。

(?)

口を動かしながら、雪は首を傾げた。

「泊まる許可はムギナ様にもろた。

まだ質問の答えも聞いとらんし、泊まらせてもらったんや」

フォークを持つ雪の手が止まる。

雪の背後にあるソファーでは、大人達が小声で話している。

話の合間に時々向けられる心配そうな視線が、彼らの本音を物語っていた。

「・・・敵」

「てき？」

脈絡のない言葉を上手く漢字に変換できないザッキ。

「聞きたかったんでしょ？」

大人達の話し声が途絶える。聞き耳を立てているのだろう。

痛い位の沈黙。

雪は、皿の上の野菜をフォークで転がした。

「・・・テキって、敵味方の敵？」

頷く雪に、ザッキが困惑した表情を見せる。

「なんでっ」

「殺されるか逃げられるか、それだけ」

雪の抑揚のない声が、冷たく響く。

いつかの時のように、感情の完全に抜け落ちた顔が現れる。

「なんでいるの？って」

「？」

「まだ死なないの？って」

「おい？」

「どうしてまだ生きてるの？って」

「おいっ！！」

「早く死んだ方が楽でしょって」

「もう分かったから！」

それ以上言わんでええっ」

青ざめた顔のザッキ。

雪は彼を見て首を傾げる。

「私は何で生きてるの？」

そのいつにない饒舌さが、言われた回数を容易に想像させた。

聞いていたのだろう大人達の方から、はりつめた空気が流れてくる。

（ああ・・・きっとコイツは親に愛情をもらわれへんかったんや）

ザッキはようやく理解した。

そして・・・

他人に、生きていて良かったと言えるのに。

他人の涙を止める方法を知っているのに。

なのに。

それをした本人が、される事を知らない。

（悲しい奴や）

見えないけれど、おそらく彼女は心の中で今も涙を流しているに
違いない。

（俺は・・・こんな奴を叩いてもたんか）

後悔と自己嫌悪で押し潰されそうになる。

チラリと向かい側を見れば、雪が何事も無かったかのように食事
に戻っていた。

「ごめんなさい。本当にごめんなさい」

勢いよく頭を下げるザツキ。

雪は口をもごもご動かしながら見る。

ごくんと飲み込んだ後、首を傾げた。

「なに？」

「何も聞かずに決めつけて。叩いて、ごめんなさい」

頭頂部を見せるザツキに雪は首を横に振る。

「なれてる」

何も聞かれないのも。

叩かれるのも。

雪の言葉は、彼の心を余計にえぐった。

（何か俺に出来ること・・・っ！

俺に出来ることは無いんか？！！）

「なあ」

空になった皿を前にし、雪はザツキを見た。

「友達になってくれんか？」

「ともだち？」

「うん。アカンか？」

「・・・」

ザツキは怒られた犬の様にしょんぼりとして待つ。

一方、雪は聞き慣れない言葉に首を傾げた。

（ともだち・向ここの学校で聞いたような）

入学式などに生徒達が言い合っているのを何度か聞いた気がする。

（・・・ともだちって何だっけ？）

あまりにも使う機会から離れすぎた所為で、必要のないものだと忘れてしまっていた。

確か友達になるーとかいう使い方をしたはず。

悩む雪。

断られるかも、と戦々恐々するザツキの存在は脳裏から完全に消えている。

（そのあと何て言ってたっけ？

ああ、あれだったかな・・・）

「なかよくしてね？」

思わず口から零れた。

返事と勘違いしたザツキの顔が喜色ばむ。

「ホンマかつ?!」

初めて会った時に見せたキラキラした笑顔。

(・・・いつか)

訂正するべきか迷ったが、相手の顔でどうでもよくなる。

(ともだち)

意味は分からないにしろ、悪い言葉ではないに違いない。

雪は、ぽかぽかとする心を楽しんだ。

『お前みたいな子が幸せになれるなんて思わないことね』

心のどこかで響いた声をふさいで。

次の日の朝。

黒髪をなびかせ、雪は泉へと向かう。

後ろから足音が聞こえない。

どうやらリゾンに気づかれずに出て来てしまったらしい。

しかし、構わず雪は歩き続ける。

朝日が木々の間から漏れ、朝露の付いた葉が煌めく。

いつもより緑が鮮やかに見えるこの時間が、雪は好きだった。

しばらく歩けば、大好きな泉に着く。

（あ、どうぶつ）

対岸に、鹿に似た動物の親子が水を飲みに来ていた。

少し得した気分になる雪。

まるで友達の出来た彼女を祝福してくれているような。そんな気持ちだった。

心地好い朝日の下、唐突に今までと違ったことをしてみたくなかった。

雪は水際にそって足を踏み出す。

（リゾン、シュリル、ムギナ、ザッキ）

心の中で唱えれば、知らず知らずの内に口の端が上がった。

柔らかに微笑む少女を、言葉無き者達だけが見ていた。

「ああ、今日はどうやら当たりだったようだね？」

背後から聞こえた声に、雪は足を止める。

（ひみつなのに）

自分と限られた者だけが知る場所。

女の人の声にそれが失くなったと知る。

拗ねた　　そうは見えない無表情のまま、雪は振り返る。

最初に目に飛び込むのは、鮮烈な紅。

「こんにちは？可愛らしい、お嬢ちゃん」

ナイスバディなお姉さんがそこにいた。

12 王達の記憶（前書き）

R指定に引つ掛かるものがありましたら、ご一報下さい。

12 王達の記憶

時は少々遡る。

「陛下……」

暗闇の中、もぞりと目の前の白いシーツが動くのをマレーは見た。

気怠げに起き上がるは美貌の王、ディレイ。

「どうした」

「今宵も召さないのか？」

「いらん。気が乗らない」

「そう言い続けてもう二年が経ってるぞ。」

溜め込むのは身体に毒だ」

女を傍にと言うマレーに、ディレイは深いため息を吐く。

「何度も言っている。いらん。」

居ても邪魔なだけだ」

しっしつと、ハエを追いやるように手を動かす。

「……外に居るから、欲しくなったら呼べよ」

扉の閉まる音にマレーが出て行ったと知る。

（一晩中外に居るつもりか。迷惑な）

もう一度ディレイはため息を吐いた。

（しかし・・・女に興味が湧かなくなるとは。
あれは本当の事だったのか）

今は亡き父を思い、ディレイは眉間に皺を寄せる。

それをディレイが聞いたのは、十二の成人の儀の後だった。

「ようやくお前も大人か」

部屋に入るなり言われた言葉。

愛する妻を亡くし、一気に老け込んだ男がそこにいた。

王妃が生きていた頃に讃えられた美しさはもう無い。

彼もまた歴代の王達と同じく、伴侶の死と間を置かずこの世を去るのだろう。

（でも今日は少し調子が良さそうだな）

彼の持つ色を濃く受け継ぐ少年は、嬉しそうに笑った。

椅子に座る男の手招きに応じて、少年が彼の傍に跪く。

（父上・・・無理して大丈夫だろうか？）

不安が胸を過ぎり、少年は眉をハの字にする。

「何だ、私の心配か？」

心配しなくとも、まだ死なんよ」

ほとんど灰色に近い青の目がディレイを見つめていた。

「私の命が消える前に、お前に話さなければいけない事がある」

「俺を呼んだのはそれが理由ですか。」

人払いまでして・・・一体何です？」

「今から話す事は、王族の口伝によつてのみ自分の子孫へと受け継がれてきた。」

・・・誰もが知る五代目の、悲劇の真実だ」

「五代目・・・王妃を手に掛けた王」

女狂いは初代から変わらず続く悪習慣。

それを抑える事のできる唯一の存在・・・神運の子がそれだという事は誰でも知っている。

「うむ。確かに五代目は浮気に嫉妬して手に掛けた。」

しかし、だからこそ制約が増えてしまった」

「制約？」

「私達子孫は神運の子に出会ったと同時にその身ごと囚われる」

「どういう・・・？」

「生きていけなくなる。ただそれだけだ。」

私達にとつて彼女達は原動力であり命。

彼女達がいなくては子もできなくなってしまう」

口が渴く。

ありえない話だと理性が叫んでいる。

「まさか・・・」

「いずれ分かる。

お前がいずれ王となった時とかにな」

灰色の目を閉じ、男は疲れたように椅子の背に身を預けた。

「これまでの王達の全てを知りたければ、王錠の箱を開けるといい。
鍵は死の間際に渡そう」

「王錠の箱・・・伝説では無かったのですか」

王族の秘密。

その全ての文書を一つの箱に入れ、王自ら鍵番をしている そ
んな有りがちな伝説がまことしやかに囁かれていた。

啞然とするディレイ。

「知られてはならぬ。

ただ一人の女が、我らの最大の弱点だと。

悟られてはならぬ。

秘密がある事自体を」

そうして我らは王族たりえるのだ。

男はそう締めくくった。

朝日が空を赤く染める頃。

ディレイは寝室と執務室をつなぐ扉を跨いだ。

大量の紙が積まれた机を回り込み、椅子に深く腰掛ける。

「神運の子、か・・・。」

何がこの世にあらざる美女だって？」

あの醜い顔。

思い出す度に黒い感情が湧き上がってくる。

「せめて平凡でさえあればマシなものをつ」

ムツツリとした顔で、デイレイは右腕の袖をまくる。手首から肘にかけての黒い入れ墨が現れた。くねくねとした形は神聖文字の一字だ。

意味は、鍵。

（できる事なら一生見たくなどなかった）

執務机の一番下の引き出しに、入れ墨を触れさせる。

ガチャリと音が鳴った。

引けば、中には重く古めかしい箱が入っている。表面に白く広がるのは埃だろうか。

「王錠の箱・・・」

王という呼称が付くにはあまりにも地味な、何の変哲もない黒茶色の箱。

デイレイは、それを一度も開けた事がない。

「本当に開くのか？」

しばし躊躇うが、やがて決心したのか右腕を近づける。

ガコン、と重厚な音が箱を震わせた。

今にも壊れてしまいそうな蓋をゆつくりと持ち上げる。

(・・・巻紙？)

黄ばんだ、今では見かけない巻紙。

幾重にも巻かれた紙を広げてみれば、少しにじんだ文字が現れる。

「ここに代々の王妃を記す」

始めにはそう書かれてあった。

「一代目国王妃、白く透き通った肌に金の髪。

目は翠に輝き、こぼれ落ちそうなほど大きい。これほどの美しさは見たことがない。

身長はこの国の女性とあまり変わりはない。本人によれば年齢は15だとか」

一代目から流して見ていく。

先代達は競う様にして、自分達の妻を褒めちぎっている。その分量は代を追う毎に多くなっていた。

「ただの惚気かよ」

不愉快極まりないというようにディレイの眉間に皺が寄った。

紙を巻き返し、五代目まで読み飛ばす。

「五代目国王妃、琥珀色の滑らかな肌にフワフワと揺れる黒髪。底の見えぬ黒目が誰の視線をも奪いさる。

山と谷のように優美な曲線を描く身体は、素晴らしい包容力を持つ。ああ・・素晴らしい」

文を見る限りでは、五代目もそれまでの王と変わりなく妻を溺愛していたようだった。

文はそれ以降も長々と続く。

が、途中でまるで嵐にでもあったかのように字が揺れる。

『騙された！騙されたのだ！

愛しているだど？！何をだ！

許せない！許せるものかっ！．．．．殺してやる！

相手の男もろとも殺してやる！』

（記録というより、王の心の日記だな）

五代目国王の最後の筆跡をなぞり、ディレイは深くため息を吐く。

相当の怨みをこめたのだろう。文字は紙に刻まれるようにしてあった。

紙の上を彷徨っていたディレイの指が先へと動く。

「六代目国王妃、黒目黒髪。髪は長く、引きずる程。肌は黄色味を帯びた白。素晴らしい容姿だ。何よりピンク色の唇が情欲をそそる。ただ、私が国王につくにあたって神のお告げがあった……これかつ！」

ディレイの表情が喜色ばむ。

続けて文字を追う。

「宝石は全てを虜にする。

心、身体、命、全てを繋ぐものなり」

どうやら宝石とは神運の子を指すようだ。

その後はお告げに対する国王の考察と実体験が続く。

ディレイはそれを読み終えると、静かに目を閉じた。

彼の眉間にはくつきりと皺が寄っている。

「そうか……神はそれ程までに……」

胸元の首輪を探り、ちぎれんばかりに握りしめる。

「……これは枷だ。」

私たち王への枷だったんだ」

上げられた瞼から覗く青目には苦悩が、口には自嘲の笑みが浮かぶ。

「手に掛けさせず良かったと言っべきか」

脳裏には若くして將軍の座についた幼馴染の姿があった。

「せめて平凡であれば・・・」

幾度となく口にした言葉を今日も繰り返す。

12 王達の記憶（後書き）

もの凄い勢いで書き上げたので、ミスがあるかもしれないです・・・。

さらっと確認は致しましたが、もしあれば黒倒して下さい。
後々修正します。

13 欠ける者たち

ディレイは再び紙を巻き戻し、父であった先王の記録に進んだ。

（父上・・・）

数度しか見たことのない父の筆跡。

確かに彼の人が生きていたという証拠の前に、思わず読む声が震える。

「二十八代目国王妃、透ける様な金の髪と薄茶の瞳を持つ。甘い香りのする白い肌はなめらかでみずみずしい。伝承通りの美女に相違ない。しかし性について開放的な考えを持っていたらしく、その身に既に純潔は無かった。忌ま忌ましい。

・・・母上は、父上が初めてでは無かったのか」

記憶に残る母を思い浮かべ、ディレイは苦笑をこぼす。

（・・・いや。あの美しさでは、仕方のない事だったのかもな）

今はゲートに居るであらう、神運の子を思い浮かべる。

（外見がアレの様でなかっただけ、マシというものだ。でしょう、父上？）

ディレイは机の端に転がる筆を手にとる。

そして白紙の部分に狙いを定め、筆を走らせ始めた。

『二十九代目国王妃、髪は漆黒で艶は皆無。目は』

そこまで書いて、自然と彼の手が止まった。

（目は・・・見ていないな）

重く垂れ下がった紫色の両瞼で見えなかった。

しばし考えた後、ディレイは再び手を動かす。

『目はおそらく黒か茶。』

（今までの記録に他の色は無かったんだ。

黒髪といえば黒か茶。きつとどちらかだろう。）

『顔は、寝台を共にするなど考えもつかないほど醜い。紫色の瞼はどちらも腫れ下がり、頬は痩け、見てはいないが身体も貧相なのだろう。』

だからか、愛など感じなかった。愛など感じる前に、憎悪が湧いた』

無意識にも筆を持つ手に力が入る。

力をいれ過ぎて震える手に従い、文字も僅かに揺れ動く。

（五代目の気持ち少し分かるな・・・）

『私はあんな女を寄越した神が憎い。だから運を捨てた。女をゲートへ押しやった』

ディレイの目が中身のない王錠の箱へと向けられた。

『しかし、どうやら私の反抗もここまでの様だ。神運の子と王とに関わる秘密を悟られない為には、あの女が必要となる。後継者を作る器を持つあの女が』

（・・・だが俺は憎み続けよう。

あの顔、あの身体を心底憎み、心に壁を）

筆を置いた手を握りしめ、ディレイは青目を宙に漂わす。

面白くない未来が見えているのだろうか、目は険呑な光で満ちていた。

「愛はない。

王妃は道具だ」

昨日の未処理の書類をチラリと見、ディレイは冷たく笑った。

「ちょうど良い機会だ。

アレを片付ける為にも、一度ゲートへ行くか」

「父上、進軍の準備が整いました」

赤い絨毯に跪くドレス姿の女。

その向かいに立つ老齡の男は子供のように笑う。

「ははっ、そうかそうか」

どうやら男の機嫌は良いらしい。・・・むしろ良すぎて、殺人衝動が抑えられなくなったようだ。

絨毯の上に転がる身体は、その『遊び』の犠牲者なのだろう。

飽いた遊び道具を男は踏み越える。

歩き出した彼の後に女が続いた。

「父上、神運の子はどうなさるおつもりで？」

「どうでもよい。捨て置け」

「・・・不要でしたら、私にくださいませ」

男は笑みを引っこめる。

「欲しいか」

「ええ。非常に興味がありますの」

「なら、やる。研究結果は還元しろ」

「もちろん」

女は狂気に染まった目を細め、笑った。

それは男との血縁を十二分に感じさせるものだった。

「我らニシーノ国が神を得る。

お前も例の娘が欲しければ、それに協力しろ」

「・・・ええ、父上の御望みのままに私は尽くしましょう」

二人が歩き着いた先は広いテラス。

城の高い位置にあるテラスからは城門・城下が一望できる。

今、彼らの眼下にある城門前には、兵士達がアリの様にひし

めきあっていた。

兵士達はニシーノの国色でもある紅の戦装備を身に纏う。

ひらりと風に舞うマントの裏は黒。赤い表には黒糸で壺が刺繍されていた。

その壺は、狂気と享樂の神・リロイの二つある神具の内の一つを模している。

テラスに立つ王族の姿に気づき、兵士達の間には張り詰めた沈黙が流れる。

眼下を見渡し、王は口を開く。

「長い間、ニシーノ国は苦しんできた。

・・・いや、苦しまされてきたのだ。あのリロイ神に」

まるで独り言の如く紡がれた声に、兵士は聴き入る。

「神が何を思っただとラジェヌを分けたか知れぬ。

だが、我らの奥底で燦る狂気は、今もラジェヌを一心に求めている。

お前たちの中にも妻を悦ばせる事が出来ぬままに、その身の狂気によって死に到らしめた者もおろつ」

そうだ！やら辛かった！やら、声が上がる。

テラスに立つ男は片手を上げ、それらを遮った。

「しかしそれも近く終わる！

ラジエ又は自らその守り手を手放した！

今こそ我らに狂気と享樂の均衡をっ」

『狂気と享樂を』という唱和と共に兵士が行進を始める。

自分達の勝利を信じて。

狂気と享樂。

愛の中にあるが、裏に隠れて見えにくいソレら。

普通なら両方持つはずが、ニシーノ国民とラジエ又国民は違っていた。

どちらの国民も、どちらかが欠けていた。

欠けている事に薄々気付いてはいるが現状に満足するラジエ又に
対し、ニシーノは必死に片割れを求めている。

愛したい。大事にしたい、と願っているのに、狂気がそれを壊してしまう。

どうにもならない狂気に長年苦しみ続けたニシーノ国民達はもう限界だった。

求めるは享樂を持つラジエヌ。

享樂さえあれば、享樂を持つ血を得さえすれば……

「お前の母親もこれで救われよう」

テラスに立つ男の言葉に、女は目を見開く。

「あら？愛しておられたのですか。

てつきり父上には狂気しかないものと思っておりましたわ」

「……知っておろう。王族の血に流れる狂気は、民の比ではない。

私の唯一の子であるお前をラジエヌに送ったのも、それがあったからだ」

「私も愛されていたとは……知りませんでしたわ」

クスクスと笑う女を、黒々とした目で見える男。

「ああ、愛しているさ。

それ故にいつ殺すかも分からんがな」

「私も父上を愛しておりますわ。

いつ王座を奪い取るとも知れませぬが」

どっちもどっちだ。男と女は似たような顔で狂った笑みを浮かべた。

赤い髪がふわりふわり。笑いあう二人を囲み揺れていた。

14 暗躍（前書き）

イマイチ・・・修正候補に認定。

14 暗躍

「しかし、そう簡単に神運の子が我らの元に来るか？」

黒馬の上で揺られながら、ニシーノ国王が呟く。

「来ますわ。」

特別上等な撒き餌を送りましたもの」

「・・・撒き餌？それはまた物騒な」

くつくつと笑う男を、並んだ馬の上から見上げる女。

「物騒？」

立派な戦略とおっしゃって下さいな」

「フンッ。小賢しいことを言う。」

で、その撒き餌が裏切る確率は」

「ゼロですわ」

えらく自信満々じゃないか。王は楽しそうに笑った。

「幸い国境まで時間はたっぷりある。」

企みとやらの詳細を聞こうじゃないか」

垂れ下がるソレを見て、ぱちくりと琥珀の目が瞬く。

「にゅー？」

首を傾げた雪に微笑む、理想的な肢体を持つ女。

青空の下、二人は泉の岸边に座っていた。

女が着ているのは、鮮やかな赤いワンピース。

うつすらと緑の混じった金色の長髪にそれは良く映えていた。

女の黄緑の目が瞬きをする

「ニューモラス。貴族のペットとしてよく売れるのさ。

ほら、この長い耳とフサフサの濃い緑の毛が可愛いだろう？

・・・ああ、手には鋭い爪がある。気をつけておくれ」

伸ばしかけた手を雪はピタッと止める。

「・・・ふふつ。そんなに警戒しなくともいいさ。
ちよーっとだけ気にかけておけばいいんだ」

女はニューモラスと呼んだ動物を雪の膝にそつと乗せ、雪にウインクをする。

逆立てていたモコモコの毛を元に戻し、丸い水色の目を雪に向けてニューモラス。

（緑色のうさぎ・・・？）

雪は忠告に従い、手を出さない。

鎖を繋がれた両足からニュツと伸びる爪が白銀に光り、雪は身を震わせた。

「さつきはいきなり話しかけて悪かったねえ。
この辺はコイツの生息域でさ、捕まえる為にアタシは来たんだけど・・・」

泉の岸边に立つアンタを見て思わず妖精かと思っちまったんだ」

あははつと豪快に女は笑った。

「まーしかし本当に可愛い嬢ちゃんだ！こりゃあ間違っても仕方がないね！
あつと自己紹介しなくちゃ・・・アタシの名はアリス。よろしくな
っ」

差し出された手を見て雪は首を傾げる。

雪の反応にアリスは一瞬怪訝そうな顔を見せたが、手を引いて笑う。

「あつはは、握手を知らないとは難儀な子だね。
で、アンタの名前は何だい？」

「・・・ユキ」

「へえユキっていうのかい。

ユキって言やあ、空から降ってくる白い奴と同じだ。

寒いのは嫌なのに、あれが降ると何故かそれもどうでもよくなるんだよなあ」

何故かね？とアリスは笑った。

（ここでも雪は雪）

雪は自分の名前と同じものがあると知り、少し嬉しく思った。

「人を楽しませる良い名だよ」

（ほめられた・・・）

いい人、と雪は判断した。

「さて、そろそろアタシは行くとするかな。」

アリスは立ち上がり、雪を見下ろす。

「・・・ちなみに聞くが、いつもここに来てんのかい？」

雪は首を限界まで上向かせ、アリスと目が合うなり頷いた。

「じゃあ、また明日来てもいいかい？」

再び頷く雪に、アリスは満面の笑みを浮かべる。

「じゃあ明日またここで会おう。」

約束の印にそのニューモラスは置いてくよ」

ガサリという音と共に、地面に溜まった枯れ葉が舞い上がる。

日の光で照らされた白銀の色。

「だあれっかな？」

背後から、やたらとテンションの高い声が届く。

「アンタ、女に対する扱いを知らないのかね」

「怪しい奴には女も男も関係ないと思うよ？」

「悪いけど、アタシはごくごく普通の一般人だよ」

首に大剣の刃を当てられながら堂々と、一般人だとのたまうアリス。

その命の駆け引きに慣れた様子にリゾンは眉を寄せる。

「全くそうは見えないなあ」

「何処をどう見ても、ただのか弱い女だろう。」

「……で、この剣をアタシに向ける理由は何だい？」

「あの子に近づく者を警戒するのが俺の仕事なの」

「ふうん。そんなに偉い子なんだねえ」

「そ。一般人が気安く近寄っていい人じゃないんだ。だからさー、近づくの止めて？」

アリスは、リゾンの言葉を鼻で笑った。

「全く陰でコソコソしてる奴がいると思ったら、アンタだった訳か。あんな可愛い娘を追い回すなんて、まさか変態？」

「かわいーコを追い回すのは、男の悲しい性ってヤツじゃない？
っていうか話聞こうよ、おねーさん」

くいつと寄せられる刃先を見下ろし、アリスは盛大なため息を吐いた。

「約束、アタシに破らせる気かい？」

「君の約束なんて、俺には関係ないっしょ」

「あの子を悲しませる気って聞いてんだよ。鈍い男だな」

「……だから？」

リゾンの声に少しだけ怒気が含まれた。

「アタシが見たところなんだけどさ。

あの子、ちよつと前までかなり人間不信だっただろ？

普通、あんなビクビクしない」

「・・・お前、本当に何？」

ピリリと空気が凍る。

リゾンが出す大量の殺気がアリスを囲う。

「何をそんなに警戒してるのか知らんが・・・とりあえず、この剣は退けてもらおうか」

女は首にある大剣の刃を素手で挟み、腕力にモノを言わせて退ける。

傭兵として、腕力にそれなりの自信があつたリゾンは息を飲んだ。

「アタシは何処にでもいる一般人さ。

ちよつと力が強いだけのね。

安心しな。あの子を傷付けるつもりは無いよ」

リゾンの拘束から抜け出たアリスは枝を掻き分け、森の中を再び歩きはじめる。

半身ほどもある長さの剣を手にリゾンは笑み、鋭い視線を彼女の背中に突き刺した。

「……その言葉、今は信用してあげる。

でも、すこしでも何かしたら殺すからね？

人並み外れた腕力があるうと何があるうと殺す。ね？」

アリスはしばし立ち止まって身体を捻り、視線を合わせて微笑する。

「ああ、肝に命じて明日来よう」

木の葉に隠れていくその姿が完全に消えるまで、リゾンは彼女を見つめ続けた。

アリスの気配は途絶え、握っていた剣を背中の中鞘に仕舞う。

（要警戒ってことかなー）

泉を振り返るリゾン。

彼の立つ場所から雪は見えない……が、その視線の先にはおそらく彼女がいるのだろう。

（……偉い子、ね）

ムギナやシュリルの態度から薄々気づいてはいた。

詳しくは知らないが、おそらく一般人が敬語もなしに話せる人物ではないのだろう。

（嫌な予感がビンビンするう）

長い傭兵時代で培った第六感が、雲行きの怪しさを伝えてくる。

リゾンはもさもさの茶髪を掻き乱し、嫌だなあと呟いた。

「出来れば、あんまり傷つかないで欲しーな」

赤い目が、泉の傍にいるであろう雪を思っただ陰る。

しかしすぐに、リゾンは頭を軽く振って溜まった思考を散らした。

「俺が考えてどーにかなるものでもないよなあ」

心機一転。

両手を頭上高く上げ、ぐぐつと背伸びをする。

十分に背伸びを堪能した後は深呼吸。

肺に新鮮な森の空気を入れ、いっぱいになれば吐き出す。

幾度か繰り返し、彼は泉へと足を踏み出した。

「さて、脱走癖のあるお姫様の所にもいこつかな」

彼の顔には、いつものやんちゃな笑顔が浮かんでいた。

15 初春

「アリス。」

お前の役目が今回の任務の要なのだぞ！」

「十分に理解してるさ、隊長」

「それでこのザマか!!」

（コイツ、本当にうるさい。

唾飛ばすなってんだ）

「そもそも、そんな派手な格好で行くから、こんな事になるんだ」

長い金髪をかき上げ、アリスはうんざりとため息を吐く。

「貴様、ため息を吐くな！」

「長いし、うつとうしいし、疲れた。

だからアタシ、もう寝たいんだわ」

「黙れ、この睡眠過多女！」

事態を引つ掻き回しただけのくせに、何が疲れただっ」

「事実だ、この幼児め」

「幼児ではない！ちよつと若いだけだ」

「・・・ちよつと？」

アリスの疑問は尤もの事。

なにせ今、彼女の前で椅子に座っているのは立派な子供なのだから。

こぼれ落ちそうなほど大きい灰色の目に暗い赤髪。ぷにぷにツル

んな紅色ほっぺは、持ち主の機嫌によって膨らんでいる。

将来良い男間違いなしの彼。だがしかし今はまだ十一歳になったばかりで愛くるしさが目立っていた。

「それでも一応お前の上司！」

パタパタと駄々っ子のように振られる手足を見れば、どうしても母親にねだる子供にしか見えない。

（何でこんなのが隊長なんだか）

アリスは自身の置かれた境遇に、今でも疑問を持ち続けていた。

「・・・で、何で接触なんかしたわけ？
来たる時まで動くなって僕は命令したはずなんだけど」

ムスっとして問う少年に、アリスはニヤリと笑う。

「もちろん。全ては主の為に」

「うむ、主の為に行動するのは良い事だな。
だが！向こうには護衛が居るんだぞっ」

「ああ、流石に気づかれたみたいだな。
でも任務は成功するよ」

「・・・一体その自信はどこから来るんだ？」

少年はしばしアリスを眺め、そして深々と息を吐いた。

「任せてやる。」

・でも、傷なんか付けないようにしなよ？

じゃないと首ポロンだ」

「分かってるさ。」

主には無傷で届ける、それがアタシの任務だからな」

じゃあアタシは寝るよ。そう言って、アリスは少年に背を向けた。

が、途中でふと立ち止まり、思い出した様に少年に向き直る。

「何だ？まだ何かあるのか」

「一つ、上に報告しておいて欲しいことがある」

「？」

少年の眉間に作られた皺を見たアリスは口の端を上げ、爆弾を落とす。

「今代の神運の子が醜いっていう情報、あれはウソだ」

そよそよと吹く風。

（これってやつぱ、あの女がユキに渡したんだよなあ）

いつもの様に泉の岸边で座るリゾンの膝に、これまたいつもの様に雪が座る。

そして、いつもと違って雪の膝で丸まる緑の生き物。

手足を鎖で縛られている所為か、それとも雪に害はないと判断したのか。理由は分からないが、ニューモラスは雪に対してだけ何故か大人しい。

（まだ大人になってないし、ユキに母性を求めてるんだろうな）

なんとも微笑ましい想像に、リゾンの目が生暖かくなる。

「飼うの？」

これだけ大人しいのだから、とニューモラスに伸ばされていたユキの手がピタリと止まる。

（飼うって言ったら、餌代とかどうすんだろ？）

リゾンを雇う時でさえ、金は無いとムギナから断言された程であ

る。人間四人でも相当苦しいのだろう。

（まーあの人達なら意地でもユキの願い叶えそうだけどね）

「飼うんなら、シユリルとかに言わないとね？」

「かわない」

「え、飼わないの？」

てつきり飼いたいのだと思ひ込んでいたリゾンが目を見開く。

雪はこくりと頷き、中途半端に伸ばしていた手を下げる。

「やくそくの印だから、明日返す」

「ふうん。返すんだ？」

でもコイツ、物じゃないぞ」

リゾンの声のトーンが低まった。

おそらくこのニューモラスは、あの女が雪に近づく為に用意した道具。

（つまりは、返されても用済みってこと）

女の元へ返却されたニューモラスは殺されるか、それとも森へ放されるかのどちらかに違いない。

まさか本当に貴族に売るなんていう、自分を他人に見せる行為はしないはずだ。

（・・・俺の予想通り、アイツが彼の国の隠密ならば、きっとそうするはず）

たとえ運よく森へ放されたとしても、親から引き離された子供はいずれ死ぬ。

（それは・・・ちよーっと無責任じゃないかな？）

流石野生育ちだとしても言うべきだろうか。

リゾンの不機嫌をいち早く悟ったニューモラスが雪の膝でバツと頭を上げる。そして、ひたと警戒の眼差しをリゾンへ向けた。

チャリリと、動きに合わせて鎖が鳴る。

音に導かれ、雪はニューモラスの鎖に左手を伸ばした。

その時、彼女の瞳に映ったのは四つの赤く丸い花弁と鎖。

（タバコの・・・）

何をもつてしても消えなかったタバコによる火傷の痕。

他の傷はもう何処にあるのかすら分からないほどなのに、それだ

けは今も在り続けている。

全く薄くなる様子もなく花のように在るソレが、雪にはとても恐ろしく思えた。

（またいつか・・・敵が・・・）

右手で左手を覆い、傷痕を視界に入れないようにする。

（くさり・・・きっとコレもこの子にとっては同じ）

私の手に残る傷痕と同じ。

キュツと左手を掴む力が強まる。

ぶるると鳴くニューモラスが雪を見上げた。

（いやだ。同じにはなりたくない。
手を痛めつけた敵と同じことはしたくない）

琥珀の目に何を見たのか。ニューモラスは鎖に触れる雪の両手に頬をすりつけてきた。

ふわふわとした毛が手に優しく降りかかる。

「ぶるる」

雪の目が僅かに見開かれ、そしてフツと細められた。煌めくその

目が、動かぬ表情の代わりに全ての感情を語っていた。

そんな、元のように和み始めた空間に雪の背後から声が割り込む。

「ねー、ユキ。」

ニユーモラスって偉い人がペットとして飼う動物なんだ。

・・・飼うんだけどね。でも、その偉い人はコイツらに何もしない」

「なんで・・・」

「野獣ごときに金を使うのがもったいない、だって。

ニユーモラスなんて森に入ればわんさか居るから、新しく買った方が安いってわけ。

だからほとんどが餓死する」

あまりの残酷さに震える雪。

（死んじゃう・・・）

雪は再び鎖を見る。

「くさり」

「ん？何？」

「くさり、取りたい」

雪の手の中でチャリと音が鳴る。

「返すんでしょー」。

そのままの方がいいんじゃない？」

不快感をわざと煽る様なリゾンの言葉に、目の前の頭が左右に振られる。

半身を捻った雪はリゾンと目を合わせ、必死に訴える。

「かい・・・たい。

いっしょに、いたい。」

リゾンがほうつと息を吐く。

(・・・うん。それでいいよ。

それが俺の求めていた答え)

この汚れを知らない純粹そうな子には、いつまでも優しくあつて欲しい。

(これはエゴ。

自己満足を押し付けているだけだと、分かってる。

・・・けど、彼女には)

手の内に飛び込んで来た弱者を簡単に手放す様な人にはなつて欲しくない。

そう思う。

初めて見た時、純粹に欲しいと思った。

でもその思いは間違いなのだと、左手に残る痕を見て気づいた。

(くさり・・・同じことはだめ)

この愛らしい生き物を捕らえてしまえば、自分は敵と同じになつてしまう。

「おい、ユキ？」

(でもちがう)

手を離せば逆に殺す事になるのだと知り、ニューモラスの鎖を握る手が震えた。

こんな鎖、無ければいいのに。無かつたら、敵と一緒にだなんて思わなくて済むのに。

最近ようやく慣れてきた話すという行為で、自分の気持ちをリゾンに伝えてみる。

怒られると思った。

でも実際に返ってきたのは、笑顔。

思い出し、知らず知らずの内に雪の頬が赤みを帯びる。

「おいって」

いつもニコリとしか笑わない顔が、至極幸せそうにふんわりと微笑していた。

とくん・・

不意に大きくなった心拍音を隠すように、雪は自分の胸に手を当てる。

（あれ・・・？今・・・なに？）

分からず、首を傾げた。

「ユキ！！」

急に耳に入ってきた声にビクリと体を震わす。

「・・・ザッキ」

雪を見下ろす紺色の目とその上でなびく金茶色の髪を見、ようやく今自分がいる場所を思い出した。

今雪が居るのは、孤児院の草原。

リゾンは孤児院まで雪を送り、後は彼の役目だよねとムギナを呼びに行ってしまったのだった。

する事もなく、ザッキと二人ではしゃぐ子供たちを眺めていた・・・はず。

（忘れてた・・・って言ったらおこるかな？）

16 波乱の予感（前書き）

お、遅くなりました・・・
少しでも良い文章になってるといいのですが。

16 波乱の予感

「大丈夫か？」

顔めっちゃ赤いで。熱あるんちゃうか？」

ザツキの言葉に軽く首を振って返事をし、ぴたりと寄り添うニューモラスを撫でる。

その手足に、すでに鎖はない。

雪の反対側にはルリアが陣取り、ニューモラスを興味深げに眺めている。

じいーっと瞬きする事なく彼女の翠の目はニューモラスを見ている。

「大丈夫なら、ええんやけど。」

でどうや、会うか？」

「・・・えつと・・・」

「聞いてなかったんやな」

しゅんとする雪に慌てたザツキは、いや実はなと切り出す。

「明日、俺らの兄ちゃんが帰ってくんねん！」

兄とは言っても、孤児院が一緒やったってだけやけど」

照れ臭そうに、それでも嬉しそうに笑うザッキ。その笑みから、どれだけ義兄を慕っているのかが分かる。

「雪にも紹介したいんやけど、会えるかって話やってん。どうや？」

にかつと笑うザッキに、雪はうーと唸った。

「兄ちゃんはそのらの嫌な奴とちゃう。

ユキもきつとそう思うはずや。会ってみいへん？」

雪はウロウロと視線をさ迷わせる。撫でる手が止まったのを疑問に思ったのか、ニューモラスが頭を上げた。

「ぶるるるる」

早く撫でてくれと鳴くニューモラスを見、じつと返事を待つザッキを見る。

戸惑う雪から返事を予想したのだろう。ザッキは眉を八の字に曲げ、がつくりと肩を落とした。

「無理強いはせんけど・・・
もし会う気になったんなら、明日来て？」

悩みながらも頷く雪に苦笑するザッキ。

二人のやりとりに飽きたのか、ニューモラスが身体を転がす。

「あつ毛なめなめしてるう！」

ルリアの素っ頓狂な声が辺りに響いた。

昼が終わり、夕方に近づく頃。

シャツと暗色のカーテンを引き、一目を避けようとする家があった。

「それで・・・相手は一体何者だと？」

閉め切ったカーテンから手を離し、シュリルは背後のテーブルを振り返る。

そこにはリゾンとムギナとが向かい合って座っていた。

「あれはたぶん、ニシーノ国のヤツだと思っな」

いつもは穏やかなムギナの顔が緊張で固まった。

「何故そう思うのか、聞いてもいいですか？」

「ニシーノは間諜にも国色を徹底させてるって、傭兵やってた時に聞いたんだよね。」

赤とかいう目立つ色、きっとそんな強制でもなきや着ないでしょ」

あんな派手な色で目立たず動くななんて無理っつーか無茶。そう言
って苦笑するリゾンをシュリルがキツと睨む。

「軽口を叩いている場合ですの？！

何故ニシーノ国が・・・」

「それはあんた達の方が良く知ってるんじゃない？」

激昂するシュリルを冷めた目で見るリゾン。

「・・・」

黙々と何かを思案し続けているムギナをチラと見、リゾンは息を吐く。

「そろそろ教えてくれないかな？
最初から変だと思ってたんだ。

「……あんた達がそこまで守ろうとするユキって、一体何者？」

シュリルはぐつと奥歯を噛み締め、口を真一文字に引き結ぶ。

深い信頼を込めて、シュリルは元上司であるムギナを見た。

「……深くは言えません……しかし、本来は国をあげて守らなくてはならない御人である事は間違いありません」

ため息と共に吐き出された言葉。

リゾンはふうんと言って目を細める。

「国……ね。ユキは国を動かす存在なんだ？」

「さて、それはどうでしょうね」

（少なくとも今の現状では、陛下への影響力は皆無ですし）

続く言葉を心に留め、ムギナは苦笑いを零した。

「そこは教えてくれないって事かあ。

「……ま、いいけど」

真意を探ろうと光らせていた目を、ムギナから反らす。

柄にもなく、いつの間にか緊張していたらしい。リゾンは、前の

めりになっていた身体を椅子の背に投げ出した。

同じように、緊張で強張っていた身体をほぐすムギナとシュリル。二人は、深く聞かれなかった事に安堵していた。

しかし、続くリゾンの言葉に酷く動揺することとなる。

いわく・・・

「あーでも、だから王様がゲートに来るんだね」

「「陛下がここにっ?！」」

目を見開き問う二人の形相は凄まじく、自然とリゾンの椅子が後ろに動く。

「あ、ああ。街で噂になってるんだ。

でも、いつも食料を買いに行ってるシュリルが知らないって・・・
どうなの、ソレ」

リゾンは呆れ、ため息を吐いた。

それに対し、窓辺でわたわたと意味不明な動きをするシュリル。

「十日分を、まとめ買いしてましたから・・・」

「あーそれで知らなかったんだ。」

実はこの噂、なぜかゲート領主が必死に隠してたみたいで、広ま
ったの最近らしいし」

気の強いシュリルが、しょんぼりと申し訳なさそうにうなだれる。

「それならば仕方ありませんね。」

・・・で、噂ではいつ頃着くと？」

テーブルの上に置いた手を拳に変え、ムギナはリゾンを見た。

「あー・・・それが・・・」

気まずそうに言い淀むリゾンの反応から続く言葉を予想し、二人
は揃って肩を落とした。

風呂に入ったお陰で、身体はホカホカと温まっていた。

湯気の立つ身体を薄ピンク色の長い夜着がピッタリと覆う。

水気を含んだ黒髪から落ちた雫は、服を濃いピンク色に変えていた。

「あ・・・あの、ユキ様？」

その夜着を用意したのはもちろんシュリルである。しかし雪を見る彼女の心情には、それを褒め讃える余裕が無かった。

何かを話そうと口を開き、迷って閉じる。それを繰り返す彼女に雪は首を傾げる。

「あ・・・っ！」

（言っの！

言っのよ、シュリル！）

自分を叱咤し、当たって砕けるとばかりに口を開くシュリル。

「どうかっ。どうかこのシュリルに髪を乾かせてくださいませ！」

ギュッと目を閉じて俯き、返事を待つ。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

沈黙が部屋に満ちる。

それに堪えかねたシュリルは恐る恐る顔を上げ、雪を見つめる。

（かみ・・・？）

雪は自分の髪を見る。

真っ黒で長い髪を見て思い出すのは、敵に引きちぎられる感覚。

また同じ事をされるのでは、という思いが頭の中を駆け巡る。

しかし、ぶんぶんと首を振り、すぐに想像を否定した。

（・・・しない。シュリルはしない）

頷いて答えようと勇気を出して顔を上げれば、何故か物凄く落ち込んでいたシュリルが見えた。

床に座りこみ、涙でスカートに染みを作っていた。

何故？と雪は首を傾げ、そして思い出す。

「あ」

（くび・ふっちゃってた）

いつも考えを振り払うために使ってた行動が、シュリルに誤解を与えていたのだ。

しばし逡巡した後、雪は彼女に歩み寄った。

「シュリル」

美しく澄んだ声に、彼女の顔が上向く。

「かみ、かわかしてくれる？」

まさしく鶴の声。シュリルは急に元気になり立ち上がった。

「もちろんですわ！」

涙目で笑うシュリルに導かれ、雪は全身鏡の前に置かれた椅子に座る。

シュリルの持つ布に、髪の毛が優しく拭われてゆく。

「ふふふ」

恍惚とした笑みを浮かべたシュリルが鏡越しに見えた。

「一つ、私の夢が叶いましたわっ」

「うれしい？」

「はい！」

満面の笑顔でシュリルは頷く。

（うれしいは幸せ）

ほんわかと雪の心が温かくなった。

「ユキ様はどうでした？今日、何か嬉しい事がありましたか？」

（うれしいこと？）

考え始める雪を、シュリルの優しい目が見つめる。

そして突然、何かを思い出したのか、雪の顔が真っ赤に色づいた。

（あらら？

なんでしょうか、その反応は）

何やらいけないモノを見てしまったような気がして、シュリルの顔から血の気が引いてゆく。

「なんで・・・」

「ユキ様？」

「へんなの」

鏡を見れば、ちょうど心臓のある辺りに手をそえた雪の姿が。

シュリルにとっても覚えのあるその行動は・・・

（一体誰に惚れたのです、ユキさまぁー……っ！）

シュリルの口から、呻き声が漏れた。

16 波乱の予感（後書き）

活動報告に、アンケートを設置しました。
気が向きましたら書き込んで下さい。

17 動く盾

その暗い部屋では、ゆらりと揺れる蠟燭だけが唯一の明かりだった。

狭いベッド端に腰掛け、ムギナは一人自室で考えを巡らす。

「陛下は、おそらく見られたのでしょうね」

（それでもなければ、ここに来るはずがない）

ムギナの脳裏に古びた箱が浮かぶ。

ムギナが神官首の座に就いた祝いとして、先王に一度だけ見せてもらったのだ。

その箱は、貴族や民たちの間で昔から存在の真偽が問われて続けてきたものらしく。先王から直々に『王錠の箱』という名だと明かされた時は、心臓が止まるかと思うほど驚いた。

王錠の箱を見る事ができたのは、先王のムギナに対する揺るぎない信頼があったからこそだろう。

（しかしあれには、ごく一部しか書かれていなかったはず。それにも関わらずここへ来る。

という事は・・・そこまで追い込まれていたのですか、陛下）

「まあ、あれだけ華やかな生活をされていたのですからね。女日照りに我慢出来ないのも無理からぬこと」

ムギナの顔にじわりと苦い笑みが広がる。

正直ざまあみろと思わなくもない。・・・否、むしろもっと苦しめばいいと思う。

「運命からは逃れられませんよ、陛下。

どうやら私は未だ神官首のようですから。

その時が来るまでは、たつぷりと後悔させて差し上げましょう」

ムギナは、先日孤児院を訪れた時のことを思い出していた。

『新しい神官首？何ですか、それ』

孤児院の院長であるハミリィからその言葉を聞いた時は、驚愕のあまり身が震えた。

王に逆らい、神運の子を危険な地へと追いやるように進言する。
それは一步間違えれば、神殿と王家の関係を悪化させかねない行為である。

だからムギナは、もう神官首という座から降ろされたのだと当然のように思っていた。

しかしゲートにある神殿から、次なる神官首が任命されたとかいう通達は来ていないらしい。

（私でいいのでしょうか？

まあ、神官首のままであった方が都合はいいのですが。

……本当に、今ほどの地位に感謝した事はないですね）

不穏な者達に狙われている雪を守るには好都合な地位。

あの真実を保持していても何ら問題のない地位。

ムギナは膝に置いた手をきつく握り締めた。

全ての真実は、当事者 王と神運の子 にしか明かされない。

神官首は彼らが知るその時だけの為に存在し、真実を代々口伝でのみ受け継いできた。

（通例ならば婚姻の儀の翌日に行われる密儀にて、最上の方から知らされるはずでしたが・・・）

ディレイの拒絶により流されてしまった。

「あの聡明な陛下も一応何らかの策を講じてはいらっしやるでしょうが・・・」

愛のない策は、おそらく最善のものではない」

歴代の王達は神運の子に一目で惚れ、そして過ごす内に離れられない事を知る。

逃れられぬ未来を知った彼らは、強固な守備で彼らの妻を必死に護ったという。

・・・しかし今代の神運の子、雪にはそれがない。

（だからニシーノ国はユキ様を狙う・・・？）

「いや、違いますね」

国の要である王より雪を狙う。そんな隣国の行動に嫌な予感がするムギナ。

これまでの王ならば、神運の子は確かにラジエ又国の弱点であった。

しかしそれは、彼女達が王の寵愛を一心に受ける存在だからだ。今の雪の状況にはない。

デイレイにとって雪は、ラジエ又国と天秤に掛ける程の価値を持たない。

では、ニシーノ国がそこまでして雪を求める理由は何か。

「ニシーノ国がユキ様によって得られる価値………まさか」
なんとも恐ろしい考えに行き着き、ムギナの顔から血の気が引いてゆく。

（……まさか、知られている……？）

あの、本人達にでさえ未だ知らされていない真実を。

神運の子という存在に隠された重大な事を。

(いや、そんなはずはない。
だがもし知っているのなら)

雪は確実に・・・

殺される。

・・・と、廊下で小さな物音が聞こえた。

敵かと腰を上げたムギナは、予想以上に軽い足音に首を傾げる。

「ああ・・・もうこんな時間だったんですね」

カーテンの隙間から見える空が、赤く色づいていた。

（いつもこんな早朝に出かける準備をなさってたのですか）

道理でいつも気づかないわけだと笑う。

ベッドから腰を上げ、ムギナは音を立てずに自室のドアに歩み寄る。

そしてゆっくりと押し開いた。

まさか開くとは思ってもみなかったのだろう。

廊下には、無表情ながらも目を見開く雪の姿があった。

「ユキ様、少しお時間を頂いても宜しいでしょうか？」

雪は首を傾げ、しばらくすると首を縦に振る。

（そんな、そんな恐ろしい事・私はさせません。
ですから、まずは一つ目の策）

彼に似合わぬ挑発的な笑みが自然と浮かんだ。

まだ見えぬ目的地の方向を、まっすぐに見据えていた目。

ふいにその視線が逸らされた。

「・・・・・・」

鬱蒼と繁る木々が作り出す影を見て、女の眉間に浅く皺が形作られた。

軽く手綱を引き、乗っていた愛馬の足を止める。

「不用意な連絡は止めよと命じたはずでしょう」

不快だと言わんばかりに低い声音が彼女の口から漏れ出る。

彼女の声に引きずられるように、道端に生える木の影が揺れ動いた。

「仕方ないでしょう？」

報告する事ができたんですから」

「・・・へえ？」

では、さっさと報告なさい。ちっちゃな隊長さん」

相手の返答で機嫌が良くなったのか。馬上の女は興味深そうに目を煌めかせた。

対し、いつの間にか木陰で跪いていた少年が頬を膨らませる。

「身長が低いのは、年齢ゆえですよ」

自身の外見に何やら不満を抱いているらしい彼は、幼く見られる最大の原因が自分の言動にある事に気づかない。

ムスツとしたまま、少年が女を見上げる。

「闇からのご報告を御身に。」

今代神運の子について、お伝え致しまする」

「言ってごらん」

「はっ。」

神運の子を目にした闇によりますれば、彼女の容姿はその役目に相応しいものであったとか」

「あら・・・噂が間違っていたって事かしら」

「ええ」

馬がぶると震え、鳴いた。

張り詰めた空気を感じたからであらう反応に、女は凍った空気を緩める。

「ちっちゃな隊長さん」

「僕にはエフという名があります」

再び膨れる頬に、女は笑う。

「知ってる。・・・エフ、予定を早めるわ。」

必ずあちらの王が真実に気づく前に例の子を私に届けなさい」

木の影と相まり、濃く色づく赤黒い少年の髪がなびく。

少年の灰色の目が真紅の目を見上げた。

「・・・闇は常に貴女と共に」

命令通りに従う意思を示し、少年は深く頭を下げた。

18 虚像（前書き）

遅くなりまして申し訳ありません・・orz
書き方がイマイチ思い出せてませんが、「修正ならば後でも出来る」という図太い考えで更新してしまいます。

18 虚像

いつものように森の中を歩く。

腐葉土は優しく雪の足を受け止め、繁る草木は朝露を輝かせて彼女を歓迎する。

木漏れ日は黒髪を艶めかせ、ワンピースから出る細い手足を白く透き通らせた。

それは、まるで著名な画家が一生を費やして描いた絵画のような光景。

「ぷるるるる」

いつもとは違う、腕に抱えたふわふわで温かい感触に雪は目を細める。

本人が自覚することなく形作られた笑みには、確かな愛があった。

「やあ、来ないかと思ってたよ」

湖の岸边に立つ女は、前に会った時と同じく赤い服を着ていた。

（赤が好きなのかな）

雪は無表情に戻った顔を傾ける。

そんな雪の行動に気づかず、女も彼女に抱かれるニューモラスを見て首を傾げた。

「・・・えらくおとなしいな。

野生だから、人には懐かないはずなんだが」

女の視線を追えば、ぷりゅつと鳴くニューモラスと目が合う。

（かえしたくない）

しばし目を閉じ、そして強張った表情を女へと向けた。

「ください」

澄み切った美しい声に女はハツとする。

「この子をください」

雪の琥珀色の目を見た女は、一瞬我を忘れそうになる。

何かを切望して輝く雪の目は美しく、見ていると飲み込まれそう

だ。

（あの目で言われたら、何でも聞いてしまいそうだ）

そんな事をすれば自分の命が危ういと分かっている。それで、そう思う。

無条件に人を惹きつける。

（これが神運の子、か。
初めて恐れを感じた気がする）

女は自分を嘲笑う。

（いつもの私ならば、確実に殺しているな。
・いや、あと少しで殺していた）

闇に生きる女だからこそ感じる予感。

このまま生かしておけば、雪は確実に邪魔となる。

背中に隠したナイフへ、あと数センチという所まで伸びていた手を戻す。

（咄嗟に止めた自分を褒め讃えたい。

本能を理性で止めるなんて、流石あたしだね。

まー止められてなきゃ、あたしの命も消えてたんだろうけど）

ブツブツと呟きながら、頭を整理する女。

そんな彼女の耳に忘れかけていた問題が舞い戻ってくる。

「・・・だめ？」

声の主を見れば、潤んで光る瞳と鉢合っ。

泣くのを必死に我慢している所為か、目元の頬はほんのり紅い。

「だめ？」

傾げられた頭から黒髪が、サラリと白磁の肌に滑り落ちた。二つの色の差に、女の背筋がゾクリと粟立つ。

（ははっ！お姉さんったら、初めて色仕掛けにやられそうだよ）

女の目が虚ろに光った。

そんな風にして雪が女に猛アタックをしている光景を、彼女らの頭上から眺める者がいた。

「あー・・・あれは無理だろーねー。
俺がやらなくて良かったー」

細い枝の上に器用に腰掛け、リゾンはカラカラと小声で笑う。

「おっ？あのユキが抱きついてるー」

（いいよって言われたんだろな）

ぎゅうつつと腰にしがみつかれ、慌てる女が眼下に見えた。

ニシーノの間諜であるはずなのに、完全に雪に翻弄されている。

「うつはー末恐ろしい子！

・・・ねえ少年、君もそう思うっしょ？」

リゾンが振り返った先にある木の枝に少年が立っていた。

「少年言っな、童顔」

気配を完全に消していたはずなのに、気づかれた。その事実が少年の頬を膨らませる。

何かしら言い返したいと思って声にしたのは、予想以上に餓鬼っぽいものだった。

「でも年齢的に君は少年だよ？」

なんでこだわるの？と言外に問うリゾン。

少年はそれに答えず、ふいつと目を逸らした。

「あー分かった。あれだあれ。」

少年は年上のお姉さんに恋してるんだろー！
んでもって、年齢差に悩んでるとかー」

「……なっ！」

リゾンの言葉に、少年の顔が真っ赤になる。

「……え、凶星？」

あてずっぽうだったのに、と言うリゾンに少年が苛立つ。

「黙れ。てか、少年言うな」

「じゃあ、名前教えてよ？」

「……るくせに」

「あーいー？」

「知ってるくせに、聞くな！」

いつまで惚けているつもりだ！平和ボケか貴様」

途端にリゾンの顔から表情が抜ける。

「お前まさか神運の子にほだされたんじゃないだろうな？」

少年が険しい表情で、リゾンを睨みつける。

「違うよ」

予想外に平坦な口調で返され、高ぶっていた少年の感情が鎮まる。

「実行は明日だ」

「そう」

「元闇隊長らしく、きちんとやれよ」

「・・・そうだね」

悲しげに陰るリゾンの目を見て、舌打ちをする少年。

「なんでお前なんかが、主のお気に入りなんだっ!」

そう言い捨て、少年の気配が消える。

「ほんと、なんでだろーね?」

苦笑するリゾンの視線の先には、ニユーモラスと駆け回る雪の姿があった。

「俺も・・・俺も鎖で繋がれてるんだって知ったら、ユキはどうするかな?」

（くださいってお願いしてくれるかな?）

あの何も知らない少女の側でずっと笑ってられたら、どれだけ幸

せだろう。

リゾンはニューモラスを羨望の眼差しで見る。

「いいな」

（俺もそっちに行きたい）

リゾンは悲しげな笑みを浮かべた。

「ごめんね」

謝る理由は二つ。

今まで騙っていたからと、これからまた騙すから。

（本当の事を知った時、ユキはどう思うかな？）

知らせたくないと思う。

でも、それ以上に・・

「ユキを壊してみたいと思うんだ。
壊したら、きっと楽しいよね？」

眩くりゾンの赤眼には、確かな狂気が渦巻いていた。

「ふーん・・・で、ニューモラスを貰える事になったわけ」
「うん」

コクリと頷く雪は、リゾンの膝に座っている。

信頼しているのだろうか。くてつと彼に身を預け、口元を僅かに
緩ませている雪。

「そ、良かったねー」

よしよしと雪は頭を撫でられる。

（あったかい）

いつかの様にそう思い、雪は目を閉じた。

肌の上を流れる穏やかな風。

下ろした瞼の中でも感じる優しい光。

絶対的な安心感を与えてくれるリゾンの気配。

(このままずっといたい)

……あぁ、これがたぶん

「しあわせ、見つけた」

目を開けて上を見れば、不思議そうな顔のリゾンがいる。

視界に入れた途端に胸が温くなる。

雪は手を伸ばし、リゾンのもさつとした髪を一筋つまむ。

「・・・ユキ？」

ふわりと笑って、雪はつまんだ髪を引っ張った。

「痛い！何、どうしたの？」

彼女の手に従い、リゾンの顔が下りてくる。

「いたっ、痛いって！」

近づく彼の耳元でそっと囁く。

「一番のしあわせ、見つけた」

髪を離されたリゾンの顔が、一瞬くしゃりと歪んだ。

しかしすぐに、いつもの笑顔を見せる。

「そっか」

「うん」

頷くと同時に抱きしめられる雪。

「？」

「……ごめんね」

「なに？」

いつにない行動に雪は戸惑った。

「うっん、何でもないよー」

パツと離れられ少し寂しく思っも、くしゃくしゃと撫でられて再び満たされる心。

「ところでさ、ムギナとかシュリルには言ったの？」

突然の変わった話が分からず、雪は首を傾げる。

「ニューモラスを飼いたって事」

「・・・」

「忘れてたんだー」

リゾンは、ふうとため息を吐いて苦笑する。

「今夜言っ?」

そして、頷く雪に優しい笑みを浮かべた。

19 義兄の知らせ（前書き）

17・18話を一部修正しました。

説明文を増やし、ちょっとばかり雪を大胆にしました。

今後、表現等に修正を加える事がありますが、大きな変更はこれ位にしようと思います。

右往左往して申し訳ありませんでした。

19 義兄の知らせ

温かな重みが頭の上を何度も往復する。

「今日もこの後孤児院に行くの？」

リゾンの腕の中、うとうとしかけていた雪の目がパツと開いた。

（わすれてた……）

ザツキの義兄が来るといふ事を思い出し、顔から血の気が引いてゆく。

「……知らない人」

「ん？」

「知らない人がくるって言ってた」

「へえ」

この状況で来る人ねえ、とリゾンが笑う。

彼の笑みは、雪の背を粟立たせた。いつも見せるような子供っぽいものではなく、何かを見下しているような……そんな笑み。

雪は、こんな表情を何処かで見たような気がした。

「会わないの？」

違和感のある表情を消し、リゾンが首を傾げて聞く。

じっと見つめる赤眼から雪は視線をそらした。

「知らない人だから怖いのー？」

（こわい）

リゾンの膝の上で震える雪。

雪を心配したのか、近くで丸まっていたニューモラスが鳴いた。

「案外簡単に克服できるかもしれないよ？」

人が傍にある事の幸せを知ったユキなら、人見知りを克服できる
と思うけどなー」

「ひとみしり・・・」

「うん、人見知り。」

ユキのその怖いつて奴、たぶん簡単に言っちゃえば人見知りだと思
うんだよね」

リゾンは雪の頭をくしゃくしゃと撫でる。

「ユキ、行っておいで」

有無を言わせないリゾンの満面の笑み。

雪は視線を揺らしながらも、こくりと頷いた。

そうしてしばらく泉を眺めた後、ムギナと孤児院へ向かうべくリゾン連れて一度家に帰る。

「すごすごと朝出ていくのを今日も見ましたわっ！
また寝過ごしたのでしょうか?！」

「えーだって、一人の時間を大切につて言うだろー?」

「護衛が護衛対象を一人にしてどうするのですか！
本当に役立たずですわっ」

「一応ちゃんと役には立ってるし」

「どこがですよ!」

そんな怒声に背中を向け、穏やかに微笑むムギナと家を出る雪。

「今日も愛しいシュリルの声が聞けて、私は満足です」

ムギナの言う言葉にしばし首を傾げ、雪は納得したように頷く。

「・・・おや、私の気持ちが分かりますか」

不思議そうに見てくるムギナに、再び頷く。

「声をきいたら、しあわせ」

リゾンの声は安心する。

勇気を貰える。

だから

「わかる」

ムギナは目を見開き、そして本当に嬉しそうに笑んだ。

「そうですか」

（ユキ様は本当に成長がおはやい。

ちよつとでも目を離したら、見失ってしまいそうです）

背後から聞こえる軽い足音にムギナは、あれ？と唸る。

（私の気持ち分かるって言いましたよね？）

気付いてハッとした。

それと同時に身体から血の気が引いてゆく。

（これは・・・流石に・・・大変な事になりましたね）

脳裏に五代目の記録が走馬灯のように流れる。

（・・・しかし、陛下の耳に入らなければ良いだけのこと）

焦ることは無い。

長く考え込んでいたのか、気づけば孤児院のある丘に来ていた。

ハッとして後ろを見れば、ちゃんと雪はついて来ている。

（シュリルは、気を抜いた私を怒ってくれるでしょうか）

孤児院の前でザワザワと子供達が集まり騒ぐ光景を見ながら、ムギナはひっそりと笑んだ。

「あんなに集まって・・・一体何が？」

ムギナの言葉に、緊張で俯いていた雪がハッと顔を上げる。

「ユキ様、何かご存知ですか？」

孤児院へと歩きながらムギナは聞くが、雪からの返答はない。

「ユキ様？」

「ユキ！」

「おねーちゃんだっ」

ムギナの言葉を遮るようにして、ザツキとルリアの声が届く。

雪を見つけた二人は彼女の元に走り寄り、雪はルリアに手を引かれる様にして集団の渦へと巻き込まれる。

「・・・」

人自体をあまり好きではない雪は、突然引かれた手を戻そうとする。雪よりも力の弱いルリアが相手であった為、簡単にそれは外れた。

だが、その自由になった手を今度はザツキが掴む。

「兄ちゃん！」

雪を引っ張りつつ、たくさんいる子供達の中から声をあげるザツキ。

その喜色ばんだ声に、中心で笑っていた男が視線を移した。

「おおっ、ザツキやんか！大きゅうなったなあ」

男は一つに編んだクリーム色の髪を肩にかけ、眼鏡越しに深緑の目を嬉しそうに細めた。

群青色のジャケットとズボンをきちんと着こなし、腰には細身の剣を身につけている。

「へへっ。兄ちゃんこそ、なんや決まってるやんか」

照れ笑いを浮かべながら偉そうに言うザツキの髪を男が撫でる。

「ザツキのくせに態度がでかいで！」

金茶色の髪をくしゃくしゃにされても笑うザツキを、若干羨ましそうに雪は見ていた。

「お？その子、誰や？」

雪に気づき、男はザツキに聞く。

「ユキ言うねん！」

俺とルリアの友達なんや」

「へえ、ユキちゃんか」

男はそう言うと、雪と視線を合わせる為に腰と膝を曲げる。

「ども！グランヴィア言います。」

血は繋がつとらんけど、ザツキの兄やっとります。よろしゅう」
「……………」

差し出された手を見下ろし、雪は固まる。

グランヴィアと名乗った男は雪の右手を強引に握り、ぶんぶんと上下に振った。

「兄ちゃんはな、ラジェ又国に仕えてるんや。
孤児院から初めて上の地位に行つたって有名やねんで！」

傍で力説するザツキをよそに、グランヴィアはでれつと顔を崩す。

「可愛えーなあ」

「…………俺の説明が台なしやんかつ」

「おっと、すまんすまん。」

ザツキのお陰で大事な用を思い出したわ」

「…用？」

急にキリツと表情を正したグランヴィアを不思議そうに見るザツキ。

「ちょっとまたゲートが荒れそうだなあ」

「それって……………」

顔を青ざめさせ、ザツキは言葉を途切れさせる。まるで言いたくないという様に口を閉ざし、心配そうにグランヴィアを見つめた。

「そ、戦争や」

苦笑を浮かべ、グランヴィアはザツキと雪を見た。

彼らの周りで騒いでいた子供達が一気に静かになる。

「皆逃げるんや。」

院長にはもう言うてある。

死にとつなかつたら院長と一緒に逃げろ」

真剣な様子に、誰もがグランヴィアの言葉を信じた。

戦争は起こるのだと理解した。

「に、兄ちゃんは？」

答えを分かっているそれでも問うのは、予想を信じたくないからだ。

「もちろん従軍すんで！」

軽くそう言い、グランヴィアは震えるザツキに向かってフワリと笑った。

「ラジェ又国軍は強いから大丈夫！」

心配は無用っちゅーやつや」

その言葉が真実かどうかは分からない。

しかしグランヴィアの声には義弟を安心させる何かがあったらしい。聞いたザッキの表情にはぎこちないながらも笑みがあった。

ザッキは血の繋がらない兄を想い、グランヴィアも血の繋がらない弟を想う。

互いが互いを大切に思っている事の分かるその光景を、雪はとても眩しく感じた。

（これがきつと合ってる。

敵と私がおかしかったんだ）

正しい家族のあり方を、雪はこの時初めて知った気がした。

ふと朝にムギナによって左手に巻かれた包帯を見下ろす。

（これもたぶんおかしかったんだ）

包帯で隠された火傷の跡を思い出し、母親に暴力を奮われる事が異常なのだと雪は悟った。

「帰る」

「ユキ？」

突然の雪の宣言に、ザツキは首を傾げた。

「逃げるために帰る」

（敵から逃げられたのに・・・死にたくない！）

いつになく必死な雪に、ザツキも真面目な表情になる。

「分かった。」

また落ち着いたらゲートで会おうな？」

「戦争が終わっても、事後処理でしばらく俺はゲートに居ると思うわ。」

やからまた俺とも会ってくれな？」

ザツキとグランヴィアの言葉に、雪は頷く。

背を向けて歩きだした雪をじっと二人が見つめていた。

しばらく歩くと、国境の街ゲートを縦断する大きな街路に着く。

この道を越えなければ家に帰る事は出来ない。

いつもなら隣に立つムギナが馬車に気をつけてくれるのだが、何故か孤児院に彼の姿は無かった。

（・・・大きい）

雪は一人街路の端に立って、目の前にそびえ立つ馬車を見上げていた。

馬車の色は群青。

とんでもなく立派な馬車の扉には、一輪の白い花が描かれている。

蕾は閉じ、ひよろりと伸びる枝には葉が一枚しかない。

（きれいな花。

本当にある花？）

首を傾げ、じっと絵を見つめる雪。

馬車の扉は目の前でゆっくりと開き、

「・・・あっ！」

雪を中に取り込んで素早く閉まった。

20 身勝手な邂逅（前書き）

後々、もう一度書き直すと思います。

20 身勝手な邂逅

視界に入った瞬間、目を奪われた。

手に入れた温もりを逃がさない様に強く抱きしめる。

ぎゅっと強く。

壊さぬように気をつけながら。

ラジエヌ国では建国当初から、広大な土地を数百人の領主に分散し、それぞれに自治を任せてきた。

これら領主自身に従うべきはラジエヌ国王であると国法で定められており、どんな場合でも逆らう事は許されない。

だがそれぞれの領が雇う兵士の主人は、厳密に言えば国王でなく領主であった。

その為、国境付近にある砦の兵士達はゲート領主の命令が無ければ動かない。たとえ相手が国王であっても、領主の命令を彼らは優先させるのである。

・・・などといった理屈により、ディレイはゲートの街路で長時間の足止めをくらっていた。

「領主は今こっち向かってるらしいぜ。
だからここでのんびり待つしかねえな」

そんな風に、幼馴染でもある将軍が笑って報告してきた時の事を思い出す。

（本来なら、既に戦争の準備が終わっている時間だった）

予定通りにいかなかった事への苛立ちが、ディレイの眉間の皺となる。

自国の砦への入場を阻まれてしまった、傍から見ればマヌケな王とラジエヌ国軍。

この事実が広まれば、国内外からのディレイに対する評価が下がってしまう可能性がある。

「領地の出入りについては兵に指示を出していたくせに、なぜ砦については出さないのだ！」

馬車の中、ディレイは一人怒鳴り散らす。

防音バッチリな王族専用の中だからか、彼の口調にいつもの丁寧さはない。加えて言えば、いささか冷静さも欠けている。

「ちゃんと指示を出しておくべきだったな。

手配する位の判断力はあるだろうと信用した俺が間違っていた！」

（敵国侵略の情報と結びつければ、俺が何でここに来たか分かるだろうに。

まったく・使えない領主だ）

この苛立ちの礼は、ニシーノの奴らを追い返してからゲート領主にするとしよう。

ディレイは固く心に決める。

そして、未だむしゃくしゃする気持ちを切り替えようと、馬車の窓へ目をやった。

見えるのは街路の傍に乱立する木々と、木と木の間からのぞく草原の端。

（たしか、この先の草地に孤児院があつたな）

ディレイの頭に、先王の時代に建てられたゲート唯一の孤児院が浮かび上がる。

そこは戦争を起こした先王が、両親を亡くした子供達に対する償いとして建てたものだ。

住み心地と耐久性を重視して建材にこだわり、惜しみなく金が注ぎ込まれた。これら大金の出資者となった王家と神殿には、国民の絶大な支持が寄せられたという。

（そういえば孤児院建設を進言したのはムギナだと、父上が笑って話していたな。・・・懐かしい）

「時間があれば行ってみるのも良い」

昔を思い出し、ディレイはうつすらと微笑を浮かべた。

ふと、木々の間を歩いている者に気がつく。

「こちらに來ている・・・暗殺の奴らかつ」

バツと腰に手を伸ばす。そこにあるのは、国一の鍛冶師が打ち上

げた至高の王剣。気難しいと評判な件の鍛冶師を納得させたのは、
ディレイの剣豪っぷりだった。

自信はある。

（負ける気はない）

木漏れ日で相手の正体がチラリと見えた。

小さく、細い身体。

「子供？・・・しかも女か」

（どちらにしろ、気は抜けないが）

暗殺者に、女や子供は多い。それは、軟弱な外見を利用して相手を油断させることができるからだ。しかも一つ一つの報酬は高く、稼ぎ口の少ない彼らに人気の職であった。

それを嫌になるほど体験して知っているディレイは、息を殺して相手を見据えた。

（相手の顔が見えたら殺す）

そう思い、ディレイは剣を鞘から引き抜き始める。・・・が、日の下に曝された相手を見た瞬間に、彼の身体は硬直した。

「・・・・・・・・っ！」

ドクンと彼の心臓が暴れ出す。

片手に収まるほど小さい顔に、庇護欲をそそる壊れそうに細い身体。

未開発な妖艶さの所為か、透明感のある白い肌に今すぐ噛み付きたくなる。

そして、それら全てがどうでも良くなるほど印象的な、金にも見える琥珀色の眼。

ディレイは直感的に確信した。

（あれこそ求めていたもの！）

彼の行動は素早かった。

剣を再び鞘へと仕舞うや否や立ち上がり、そつと馬車の扉を押し開く。

そして扉の動きに相手が気づいた瞬間、中へと勢いよく引きずり込んだ。

暴れる相手をぎゅっと抱きしめ、安堵の息を吐く。

（この温もりさえあれば神運の子など要らん）

連れ去って城で監禁し、誰にも見せないようにしよう。

ディレイの思考は既に危険区域にまで到達していた。

首にかかる相手の息にぞわりと肌が粟立った。

強烈な嫌悪感が雪を襲う。

誰かも分からない人間に抱きしめられ混乱した雪は、身体に回された太い腕に狙いを定めて・・・

がぶっと思いつきり噛み付いた。

「いつ・・・!」

力の緩んだ腕から勢いよく飛び出す。

しょうこりもなく伸ばされた腕を紙一重で避け、雪は馬車の扉から飛び降りた。

「ま、待てっ!」

背後から聞こえる声に耳を塞いで、まさに脱兎のごとく家へと駆ける。日頃森の中を歩き回っていたお陰か、足は速い。

「はふっ、はふっ」

家が見えてきた所でようやく足を止める雪。

今更ガクガク震え出した身体を持て余し、地面に膝をつく。

急に知らない人に触れられた事が恐ろしかった。

「ユキ様！」

真っ青な顔の雪に気づき、シュリルが走り寄る。

乾いた服を大量に持っている事からして、洗濯物を取り込んでいたのだろう。

「ユキ様、どうなさったのです？」

しゃがんで震える雪の背をさすろうと、シュリルが手を伸ばす。

「いやっ」

パシリという音と共に、シュリルの手が弾かれる。

「・・・あ」

酷く悲しそうなシュリルを見て、雪は一瞬泣きそうな顔になった。

「ごめんなさい」

小さく零された謝罪でシュリルは我に返る。

彼女が呼び止めようとした時、既に雪は森へ入った後だった。

森の中に雪の姿が消え、シュリルの目から涙が流れる。

「私はまだまだですわ」

感情は笑顔で覆い隠す。

それが世を渡っていく為に必要な能力であり、長年上位神官を勤めてきたシュリルの得意技でもあった。

しかしゲートへ来て雪と過ごす内に、いつしか偽りの笑顔は本当の笑顔になっていた。

「ユキ様・・・お許してください。」

私はもう、悲しい感情を隠せません」

ほろりほろりと涙が落ちていく。

「隠す必要はないでしょう?」

突然の声に背後を振り返れば、ムギナが穏やかな顔で立っていた。

「・・・え?」

「私達大人の表情を見て、子供は育つのですから。隠したら子供は表情を学べないでしょう?」

「ムギナ様・・・」

シュリルの心から、後悔が薄れて消えてゆく。

(この人どうして・・・いつもいつも・・・)

「おや、やっと惚れてくださいましたか」

「惚れてなど、おりません!」

心底楽しそうに、ムギナがクスクスと笑った。

彼に泣き顔を見られた事が恥ずかしくなり、シュリルは顔を逸らす。

「む、それは残念です。」

・・・ところでシュリル、少し相談したい事があります」

ムギナの真面目になった顔を見て、怪訝そうに顔をしかめるシュリル。

「何についてでしょうか？」

「・・・今しがた到着された陛下についてです」

ばさりと足元に服が落ちる。

（ああ・・・また洗い直さなくては）

頭の隅でそんな事を思った。

21 仕返し推進派（前書き）

ちよっぴり、いつもより長い。

21 仕返し推進派

「へ、陛下が到着し、したって・・・まさかあの噂は本当だったのですか?!」

目を見開いたシュリルは、空っぽになった手を上下に振る。もはや地面に散らばる衣服など頭にないようだ。

ええ、と頷くムギナ。

「先程確かめて来ました。

ニシーノ国軍がこのゲートへ向かっているという噂も、陛下の噂も本当のようです。

何より・・・」

中途半端に途切れた言葉に、シュリルが眉間に皺を寄せる。

「今さら隠さないで下さいまし!

何より、なんですか?」

「来ていたのですよ。兵士が孤児院に」

「・・・っ!」

シュリルがハッとした表情で森に視線をやる。そこは先程、雪が入って行った場所だった。

「では、ユキ様は・・・!」

「それは大丈夫でしょう」

「何故ですの！」

その兵は、きっとゲート孤児院の出身者なのでしょう？」

ぶるぶると身体を震わせ、真っ青な顔をしてシュリルが言う。

「そんなの私、一人しか知りませんわ！」

「奇遇ですね、私もあの方しか思い浮かびません」

そう発言するからして、彼女の言う人物をムギナも知っていたようだ。

「では・・・何故ユキ様をお止めしなかったのです？！」

あんな目立つ色の騎士服なのでから、遠目から分らないはずないでしょうに！」

「・・・ええ、確かにすぐに分かりました」

「でしたら何故？！ユキ様が神運の子であると、もしあの方に知れたらっ」

「おそらく捕らえて陛下の前に突き出すでしょうね」

「分かっていらっしやるというのに、何故そこまで余裕でいられるのですか！」

激昂するシュリルにムギナは、やっぱりという顔をする。がしかし怒られているにも関わらず、相槌をうつつその顔はどこか嬉しそうだ。

「シュリル。昨日の夜、私は決めたのですよ」

それと騎士の件と何が関係あるんだ？そう言いたげにシュリルが冷たい視線をムギナへ送る。

「・・・何を決めたと？」

彼は予想通りの冷たい反応に苦笑しつつも再び口を開く。

「先ほどシュリルは私を余裕だと言いました。
・・・見て分かりませんか？それでも私は頭に相当キているのです
が」

ハッとシュリルが息を飲む。

口元は緩く孤を描き、確かにいつも通り優しい印象を受ける・・・
が、彼の翠の目は射るように鋭く冷かった。

（この方は・・・こんな表情もできたのですわね）

神殿では天使の微笑みとも謳われた表情は、今や口に名残を残すのみであった。

「シュリル、ですから協力を願いたいのです」

激情を身の内では必死に堪えているがゆえの、空気も凍る一本調子な音程。敬語のお陰で聞く者の恐怖はいや増す。

しかし不思議とシュリルに恐怖はなく、すんなりと心に言葉が響いた。

それは、彼の激情がシュリルに向いている訳ではないからだろうか。

「貴方がお辞めになったとしても、私の永遠の上司ですわ。それにユキ様の為であると言うのなら、尚更否やはございません」

シュリルはきっぱりと、怒りに満ちた翠の目を見つめる。

その決意に対し、何故かムギナの目から怒りが消えた。代わりにいつもの苦笑を浮かべて、何やらブツブツと言いつつ頭を抱えている。

小さく、上司・・・と呟く声が聞こえた気がした。

（・・・何ですの？

さつきから今までに無い言動ばかりっ）

「・・・で、先程の私の質問には答えては頂けませんの？」

無性にイライラとする心を押さえ付け、シュリルが切り出す。

「私がユキ様のお傍に控えていたら、確実にあの方はユキ様の正体

に気がつくでしょう？

ですから、身を隠すことを優先したのですよ」

「そういう事でしたか……で、ムギナ様は何をなさるおつもりで？」

「ああ。簡単に言えば、陛下からユキ様の素顔を隠してしまおうって話ですよ」

「……」

「し、シュリル？」

彼女の紺色の目は、ムギナが思わずたじろぐ程キラキラとしていた。まるで大好きなお菓子を目の前にした子供のようだ。

（こんな彼女を今までに見たことがあったでしょうか……？）

いや、あるまい。愛する人の新たな一面に、思わず高鳴るムギナの心臓。

その表情が自分の事を話す時に出てくれば良いのに。ムギナは切実にそう思った。

「それ、やりますっ」

ぱあああつとシュリルの周囲に花が咲く。

「ぎゃふん作戦ですわね！」

（彼女に心底嫌われるような事はしません）

意気込む彼女を見て、ムギナは心の中で誓った。

「くくっ」

「何笑ってんですか、気持ち悪い」

馬車の中、ディレイは腕の傷を見てにやける。

その様子を気味悪そうに見やるマレーは、開いた馬車の戸枠に背を預けていた。馬車外には大量の兵達がいる為、一応口調は敬語だ。

（何だよ・・・不審者つつーから来たんじゃないか）
「で、一体誰です？」

この馬車に押し入ったっていう奴は」

馬車の護衛兵から報告され慌てて来たものの、肝心のディレイはずっとあの調子である。お陰で、マレーのやる気は急降下。

今も一本に編んだ自分の長い黒髪を弄りつつ、だるそうに聞く。

「・・・女神だ」

ぼつりと呟いたディレイに対し、片眉を上げた。

キョロリと周囲に居る兵達を見回す。そして今の会話を聞いていると知るや否や、馬車の中に駆け込んで勢いよく扉を閉めた。

「女抱かなさすぎて、とうとう頭が逝ったか？」

二人きりになった途端、マレーは態度を変えた。

しかしディレイは彼を一瞥しただけで、再び腕を見下ろし口元を緩ませる。

「とうとう見つけたのだ。

神運の子以外で私の身体を反応させる者を」

腕に痛々しく刻み込まれた傷痕を、ディレイが愛おしそうに撫でる。半円を描くそれは、おそらく歯形だろう。

（ああ、マジでこれは末期だ）

マレーは頭を抱える。

「美しかった・・・私はあれが欲しい」

傷痕という相手の名残を惜しみ、ディレイはそこに舌を這わせる。相手の齒の感触を思い出すように、ゆっくりと味わいながら。

「道具として妃に迎えてやろうかと思っていたが、神運の子などもう必要ない。

私はあれが良い」

「本気が」

「ああ、捕らえて来い」

「・・・・・・・・・・」

そこで初めて目が合う二人。黒色と空色が衝突する。

「・・・分かった。

で、神運の子はどうすんだ？」

「見つかるまでの身代わりにする。連れて来い」

「・・・・・・・・・・はっ」

マレーは悲しげに笑う。それを不思議そうにディレイは見る。

「お前、変わったな」

「変わってなどいない」

「いや、変わったって。」

昔のディレイは、人間を道具とは考えなかった」

昔の方が良かったと言外ににじませる。

「変わったのは、やっぱりアレが原因だろ。」

そんなにシヨックだったか？あの神運の子の容姿が」

「黙れ」

途端に不機嫌になるディレイ。

これ以上言っても何も答えないに違いない。長年の経験からそれを悟ったマレーは大きなため息を吐き、諦めて馬車から降りた。

（こりゃ重症だな・俺が見た限りじゃ、アイツもう相当本能に引きずられてるぜ）

自分ではどうにも出来ないもどかしさがマレーを襲う。

むしゃくしゃとしたまま、馬車近くで寝転がる自分の騎獣にヒラリと跨がった。

それは黒く固いゴツゴツとした肌の、四本足の獣だった。それぞれの足先から生える鈍色の爪は、一本一本がまるで小刀のように長く鋭い。鼻は顔から突き出ており、その下の口には尖った歯が所狭しと並んでいた。

顔を捻り、ギョロリと光る紫色の目が背に乗るマレーを見上げる。

「ジェイア、砦に向かえ」

彼の言葉を聞き、獣は砦へと音もなく駆ける。

人の言葉を解す頭の良い騎獣は、兵士達にとって一生で一度は乗りたい動物である。しかし獰猛な騎獣は扱いが難しく、更にそれに跨がった状態で剣を操ることはもはや無謀と言われていた。

そういった理由から一部では伝説と讃えられる騎獣。その騎獣となれる獣の中で最も難易度の高いヒルチ種が、マレーの相棒である。

砦前に着いて騎獣から降りたマレーに、兵士が一人駆け寄る。

「將軍！領主がお待ちです！」

「ああ、やっと来たか。まったく砦ぐらい開けとけよ。

で、アイツは今どこにいるんだ？」

「・・・それは副将の事ですよね？」

「そうだ」

「副将なら、先程そこに・・・」

「マーきゅん、俺なら帰つとるでえー！」

兵士の指し示した先に目をやると同時に、マレーは深いため息を吐く。

たたつと軽快に走り寄ってきた男を、マレーはとりあえず殴る。

頬で鈍い音を立てられた男は、涙目でマレーに非難の視線を送った。

「いったいやんか！軽くとはいえ、いきなり殴るんは反則やろっ」

「うつせえな。上司を変な名で呼ぶ奴が悪い」

「似合うからええやん・・・で、陛下どうやった？」

クリーム色の髪をなびかせる男　グランヴィアは、にやりと笑って聞く。

「あーあれはもう本能ギリギリって感じだな」

「我慢やなんて、そんなん今までしたことなかったからやる。

ここは神運の子に一発やっ・・・っ！！」

今度はグランヴィアの後頭部を殴る。

「言い方を考えろってんだ」

「いったー」。

はいはい、形だけとはいえ王妃様やからな」

マレーは呆れたようにグランヴィアを見る。

（何でコイツが副将になれるんだ・・・）

「ってことでマーきゅん、領主の元に行くで」
「・・・おい、その呼び方は固定か」

22 狂気と正気（前書き）

遅くなりまして申し訳ありません。〇>

ようやく物語が動きます。（ゆっくりですが）
にて。 続きは活動報告

22 狂気と正気

目の前に立ちはだかる草木を前に、雪はふと歩みを止めた。

ろくに前も見ずに歩いていった所為か、いつもとは違う風景が辺りに広がっている。

（どこ？）

唯一心を落ち着かせてくれる泉を求めていた雪は、迷い込んでしまった事に落ち込んだ。

そして先程のシュリルの顔が脳裏を過ぎり、更に落ち込む。

表情はいつも通り無表情ではあるものの、その琥珀色の目はじつとりと地面を睨みつけていた。

（もう治ったと思っていたのに・・・）

人を拒絶してしまう衝動を、どうにか出来たと思っていた。

母親から解放され、自分はもう過去から切り離されたものと思っていた。

そう思っていたのに・・・。

(もっ、いや)

敵にいつまで影響され続けなくてはいけないのか。

雪は終わりの見えない恐怖を感じていた。

頭にこびりついて離れない、あの人の声。

壊れたビデオのように何度も何度も頭の中で繰り返される。

『お前みたいな子が幸せになれるなんて思わないことね。
母親である私でさえ捨てるのに。お前に価値なんてない』

言葉と共に、蔑む目がこちらに落とされる。雪と同じように光を失った絶望の目。

暗い目は、誰かを虐げなければやってられないと語っていた。

『でしょうっっ』

敵はゆっくりと微笑む。見下した笑みは間違いなく雪に向けられ

ていた。

その思い出した母親の表情が、朝に怖いと感じたりリゾンの表情と重なる。

「あつ」

思わず両手で口を覆う。

ザツキの義兄が来ることを告げた時の表情は、過去敵が雪に毎日向けていたものだった。

道理で見覚えがあるわけだと雪は納得する。

そしてそれと同時に恐ろしくもなった。

もしかしたら、と。

（リゾンは敵とおなじ・・・？）

敵と同じように、簡単に人を痛めつけてしまえるのかもしれない。

今まで信じていた幸せな世界が揺れ動く。

「・・・ちがう」

（リゾンは守る人。傷つけない！）

雪は自分に必死で言い聞かせた。

何も崩れてはいないのだと。この世界はまだ信じられるのだと言
い聞かす。

「リゾンっ」

幸せな記憶を胸に、雪は初恋を捧げた彼を求めた。

今すぐ不安を消して欲しい。衝動と共に身体が前へと進む。

いつもの様に頭を撫でて、そして・・・

眼前の地面に広がる赤いドレス端に、リゾンは口づける。そして終わるなり素早く後ろへと下がる。

彼の動きに、足元で土が跳ねた。

「久しいわ、アンダー。」

ラジェヌの後宮で別れて以来だったわねえ？」

「ええ。殿下も息災のようで安心致しました」

森の中、リゾンは跪いていた。いつも背に負っていた大剣は、目の前に立つ存在に対して服従を示すように前の草地に横たわっている。

リゾンの前に立つ女は、くすつと妖艶に笑んだ。

「今はリゾンと名乗っているらしいわね」

「・・・亡き者の名を借りたまで」

俯くリゾンの顔は女から見えない。

だが女には、今の言葉をリゾンがどんな表情で言ったか簡単に予想できた。

「亡き者、ね。フフッ。」

貴方が殺した者の間違いではなくて？」

「・・・・・・」

「まあいいわ。」

ところで、妃はどこにいらっしゃるの？」

会ったのが楽しみだったの、と辺りを見回す女。

リゾンはそんな彼女をちらりと見上げ、また顔を伏せた。

「今から連れて参ります」

大剣を片手に、リゾンは立ち上がる。彼の言動を見た女の目が愉快げに細められた。

「へえ、私があると知っていて連れて来なかったの。」

「・・・もしかして気に入ったとか？」

「・・・・・・」

「ごまかしても無駄よ、私には分かるわ。」

だって元恋人ですもの」

「昔の話ですよ」

表情にこそ出さないものの、リゾンの声はかなり迷惑そうだ。

「あら、つれないわね。」

二人でとっても濃密な時間を過ごしたのに」

女の言葉に、とうとうリゾンの顔が歪んだ。

「ねえ今何を感じてらっしゃるの？」

女が興味津々といった眼差しをリゾンの背後へとやった。

不審に思ったりリゾンも彼女の視線を追い、後ろへと視線をやる。
そして彼の目が見開かれた。

「捨てられた御子様」

無表情に立つ雪がそこにいた。

(ユ、キ・・・)

ずくんと胸に痛みが走る。

それは彼女の無感情な目を見たからだろうか。今までリゾンに向けた事などない、全ての喜怒哀楽が欠落した目を。

リゾンは瞼を下ろし、頭を左右に振る。

（分かっていたことだ……非難されることなど初めから予想出来ていた）

「ね、今何を思っておられるの？」

声を辿り、再び女 リーレット・ドウオ・ニシーノ に向き直る。

彼女の目には紛れようもない狂気があった。

「裏切られたという悲観かしら？」

それとも絶望？

ああこれも違うのなら、非難なのね！？」

ウキウキとした感情がリゾンにまで伝わってくるようだ。

（ここまで悪趣味には、なれないな）

ニシーノ国民の誰もが持つ狂気ではあったが、やはり王族のソレは他とは比べものにならないらしい。

「ああん、焦らさないで」

一人身もだえするニシーノ王女を、呆れて見るリゾン。

しかし彼女までではないにしろ、実はリゾンも密かに答えがある

事を期待する。

怒鳴って喚き散らして、そして壊れてしまえば良いのに・・・そう期待するのだ。

（俺もそろそろヤバいかもしれない）

リゾンは自嘲して雪を見た。

様々な感情を顔に出しながら、二人は雪の激情を含んだ絶叫を待つ。

しかし返って来た反応は二人の期待するものではなかった。

「うらぎりって？」

雪の発した問いは、現状でさえ理解できていない事がありありと分かるもの。

その場に渦巻いていた濃密な狂気がピタリと動きを止める。

「・・・・・・・・あははっ」

堪えきれないといった様子でリーレットが笑い出した。

彼女の目がキラリと不穏な光を宿す。

「顔は噂通りでは無かったようですが・・・中身がソレでは」

艶やかに紅に色づいた口が歪んだ笑みを浮かべる。

何がどうなっているのか全く理解出来ない雪は戸惑いの目をリーレットへと向けた。

何かの感情を持つには理由が要る。

（まだユキの中には怒る理由も、憎む理由もないんだ）

事態の渦中に居ながら、全く変化を出来ていない。

まるで子供のような雪の拙い言動に、リゾンの中で膨れ上がっていた狂気が引いていく。

（誰かがユキを守らないと・・・）

唐突に浮かんだその思考はすぐに消えた。

しかしその後もリゾンの中の狂気は失せ続ける。

風いでゆく心に対応しきれず、リゾンは戸惑った。すぐ右に現れた、膨大な殺気を纏う気配にさえ気づくことが出来ぬほどに。

「まだ分からないわけ？」

苛立つような子供の高い声が辺りに響く。

23 戦争の理由（前書き）

お待たせしましたm（――）m
久しぶりすぎて、焦ってます。

23 戦争の理由

現れたのは灰目に赤髪の可愛らしい少年と、その数歩後ろを歩く美女だった。

二人とも派手な赤い軍服を身につけている。

周りにある景色に緑が多い所だろうか。いきなり現れた赤で雪の目がチカチカした。

(・・・)

しばらくしてようやく色に慣れた目で見ると、二人の片方に見覚えがあった。

「アリス？」

少年の後ろにいるアリスを見て、何故ここといった表情で首を傾げる雪。

当のアリスは雪と目線を合わせず素知らぬふりをしていた。笑みを浮かべた彼女の黄緑の目が見る先にはリーレットがいる。

アリスを見ていた雪の視界に突然赤髪が現れる。その色につられて下に目線を移した雪は息を飲んだ。

「・・・っ！」

さっきまで離れた場所に立っていた少年が、いつの間にか雪の近くにいたのだ。雪は少年から視線を外して後退る。

（こわいのは嫌！）

未知の人間に対する恐怖が雪を襲った。その所為か本人の意思とは関係なく身体がガタガタと震えだした。

彼女の視線は助けを求め、既知であるアリスとリゾンへと向けられた。

そんな雪を少年はじつと見上げている。雪を見る彼の灰目は嫌悪感に満ち、鋭く雪を貫く。

「初にお目にかかる。私はリーレット様付き闇隊長エフと言う。

・ ・ もう一度聞ぐが、これを見てもまだ分らないっていつのか？
」

雪は少年 エフの顔を恐る恐る伺う。エフは、黒々とした光が相手の目の中で揺れるのを見た。

そして彼はますます苛立ちを顕わにする。

（うつとうしい目だ！

さつさと理解して光など失せてしまえば良いのにつ

ますます鋭くなる灰目に、雪は再び身体を震わせる。

「・・・こども、こわい」

「子供ではないっ！」

エフだ！」

間髪入れずに答えるエフ。彼の背後でリーレットが高らかに笑う。リーレットの近くにいるアリスも顔を背け、身体を小刻みに震わせる。

絶賛片想い中の人や部下に笑われ、エフはますます殺気を濃くした。

「お前は本当にこの状況が分かっているのだな！

ラジェ又国王に捨てられたのも頷ける、この愚図めっ」

「・・・エフ、おやめ。仮にも相手は妃ですわ。

やり返したいのなら、全てを教えて差し上げれば良いこと。違う？」

笑い声を止めたリーレットがいささか厳しい声を上げる。

主の命令に従順なエフはリーレットを見、確かにその通りですねと頷く。一つ息を落とした彼は雪への向き直る。

そこに剥き出しだった殺気や怒気はなく、ただ子供らしからぬ風
いだオーラを纏っていた。

「では現状から言おう。今おま・・否、妃のおられるラジエ又と、
隣国ニシーノは争おうとしている。

それは神によって分かたれた民を再び一つにする為だ」

声が朗々と森に響いた。

突然始まった長い言葉に、雪はなんと反応して良いか分からな
かった。

「・・・」

「遙か昔この大陸には一つの国しかなく、悦楽の民と狂気の民は結
婚し血を混ぜ合って互いの衝動を殺してきた。

しかし突然国は分かたれた」

エフは顔を上げて空を睨みつける。

「大陸の中央に見えない壁が現れ、二種いた民は壁の左右にそれぞ
れ閉じ込められた。

二種の民が持つ衝動は互いによってしか押さえられない。悦楽の
民は同族と悦楽に溺れ、狂気の民は同族相手に殺し合う」

「・・・」

「・・・まさに世は混沌」

雪は話の内容を完全に理解できなかった。だが殺すという言葉だ

けが強く耳に残った。

「そんな中、何故か片方には民の特性を抑える薬　神運の子が落とされた。落とした神は、我もとずがるもう片方の民に神運の子を捕まえれば良いと言って笑ったそうだ。

悦楽の民、ラジェヌ国民はもう忘れてしまったのかもしれない。だがニシーノ国にはそう語り継がれている」

「・・・とくせいをおさえる・・・くすり？」

「そう。

でも我らニシーノが求めるのは薬ではない。我らが求めるのは」

空から雪へと顔を下ろし、エフは身の内にあった狂気を解き放つ。

「壁の消失」

そう言って笑んだ彼は懷をまさぐり、ナイフを二本取り出す。

「民を分かつ壁には消失する時がある。

先代の神運の子を迎えた王が死んでから、王と新しい神運の子が初夜を迎えるまでだ」

これまでの神運の子は、一目惚れした王によってすぐさま純潔の花を散らされてきた。

だから消失の期間はさほど無く、戦争を起こすまでには至らなかった。

だからその僅かな期間を使い、ニシーノは暗殺者を送り出す。何度も何度も。

「暗殺者の一族ごと送り込み、ずっと狙い続けてきた。

しかしついに時が来た。初夜を迎えることのない神運の子が来て、消失の期間が延びたのだ」

エフはナイフの刃を、見せつけるように舐める。

「初夜を迎えることがなければ、壁は消失したままでしょ？だからさあ」

ニヤリと彼は笑う。

理解できなくて困惑する雪の背中に、鳥肌が立った。

「死んで？」

フツと少年の姿が雪の視界から掻き消えた。

耳をつんざく金属音が辺りに響き渡る。

23 戦争の理由（後書き）

ちっちゃいエフが一生懸命話しているのを想像すると、思わずにやける。

24 背く者

雪にとってソレは、身体の真が震えるような音だった。

（・・・なに、が）

雪はナイフを向けられた恐怖と驚きで目を閉じていた。

「ユキ、大丈夫？」

優しく気遣う声が頭上から聞こえ、そつと目を開けていく。

そして自分の置かれた状況を知るなり、それは限界まで開かれる。

「・・・リ・・・ゾン？」

体温が移る。

トクンと脈打つ音を間近に聞いて、ようやく雪は自分が背後から抱きしめられていると悟った。

（さっき何かにひっぱられた・・・リゾンだったの？）

リゾンの左腕は雪の腹を抱き、右腕は彼女の目の前に大剣を垂らしている。

（温かい）

凝り固まっていた雪の表情が緩む。

「貴様っ」

リゾンに阻まれ歯ぎしりするエフ。雪には分からなかっただろうが、彼には全てが見えていた。

首を掻き切る数瞬前、リゾンは彼の獲物　雪　の背後に現れた。そして片腕で雪の手を引いて抱きしめ、もう片腕の大剣の平でナイフの切っ先を受け止めたのだ。

「貴様、元閻のくせに裏切る気かっ」

エフが身じろぎする度、剣にめりこんだナイフの先がガギガギと嫌な音を立てる。

（もたなかったかー・・・
ナイフと大剣なのにやるなあ）

自分の相棒にヒビが入っているのを見ながら、リゾンは彼に軽く言い返す。

「今はユキの護衛なんだよねー」

「頭を垂れ、リーレット様に恭順の意を示していたではないか！」

「あれはねー・・・別れの合図？」

「ふざけるなっ」

大剣からナイフを引き抜き、ゆらりと怒気を立ち上らせるエフ。彼の凄まじい形相に、雪は身体に緊張をみなぎらせた。

トン、トンと落ち着かせるようにリゾンが雪の腹を叩く。

「リーレット様」

エフが静かに主の名を呼ぶ。緊迫した状況だというのに、ゆるりとリーレットは笑んでみせた。

「何を言いたいのかは分かっていますわ。

アンダー、貴方本当に戻ってくる気はないの？

愚かなラジェ又国王の側に妃がいない今、我が国が戦争に勝つことは明白ではなくて？」

リーレットの深紅の目が、リゾンの同色なそれを見つめる。笑顔を浮かべてはいるものの、彼女の目には言い逃れを許さぬ厳しい光がある。

それを端から見てしまった雪の身体がぶるりと震えた。

しかし向けられた当の本人はただ笑っている。

「さっきも言ったんですけどー、アンダーって何のことです？

俺の名はリゾンです」

そう言いながら、彼は左腕一本で雪の身体を抱き上げる。親子を抱くようなそれは、雪が体験したことのないものだった。

（な、なに？）

一本の腕に座るといふバランスの悪さに、雪は目の前の肩を掴む。

「ユキ、そのままちゃんと掴まってねー」

リゾンは内緒話でもするかのように耳元でそう言った。ほんのり顔を赤らめた雪は、琥珀の目をうるつかせながら頷く。

二人の様子を見て、リーレットはため息を吐いた。アンダーだった頃の彼ならば、ああいう足手まといになりそうな子供は切り捨てていたのに、と。

「それが貴方の答えですか・・・エフ」

「はい、彼らは私にお任せを。」

アリスは主を守れ」

「はいはい。隊長、ちっちゃいからって負けんじゃないよ」

アリスの言葉で、ナイフを手に切り掛かろうとしたエフは脱力した。

「・・・お前はしゃべるなとあれほと言っただろっ」

「だから今まで黙ってただろう？」

「じゃあ最後まで黙ってるよ！

お前のせいで空気が台なしだっ」

「殿下、行きましょう」

「聞けコラアッ」

くだらない敵同士のやり取りを前に、リゾンは好機と走り出した。

「あ、ちょ、逃げるな！」

一瞬遅れで気配が追い掛けてくる。極限まで薄められた気配と足音に、流石だとリゾンは笑った。

（奴が相手なら、きっとかなりイイ戦いができるだろーしね）

木々の間をすり抜け、舌なめずりするリゾンの目に狂気が舞い戻る。

森の中、赤と金の髪が歩く度に揺れる。

「隊長と元隊長の戦い、見たかったんですけど」

リーレットの半歩後ろを歩いていたアリスは残念そうに言った。

「確かに見ごたえはありそうですね。」

アンダーは私の闇になる前、父上のお気に入りでしたし」

「陛下の？」

「あの頃王座が赤くならなかったのは、きっとアンダーが父上の相手をしていたからでしょうね」

その言葉にアリスが感心のため息を漏らす。

幼かった時に一度だけ見た王とアンダーの戦いを思い出し、うつとりと紅眼を細めるリーレット。

（あれは・・・本当に美しかったわ）

と、彼女は唐突に足を止めてアリスに向き直った。

「・・・・ねえ、貴女は知っているかしら？」

彼女に従って立ち止まり、アリスは首を傾げる。

「何をです？」

「妃が変わる度にできる境はとても厚いのよ。」

透明だから本当に厚いのかなんて誰も知らないけれど。境を通した視界は、厚い氷を通して見るようにぼやけるのですって」

「・・・はあ」

何が言いたいのか分からず、言葉にもならない息がアリスの口から出る。

それを尻目に、リーレットは何故かくるりくるりと片足を軸にその場で回り始める。

背景が緑豊かな所為か。ただ回っているだけなのに、まるで踊っているかのように赤が美しい。

「だからきつとここらも境になるわ」

「そう……ですか」

楽しげに言うリーレットに、分からないままとりあえずアリスは頷いた。

そんな彼女を見て、リーレットは回るのを止める。

いつの間にか、向き合う二人の距離は離れていた。

「貴女も、もう帰って良いのよ？」

温度のない笑みと共に放たれた言葉に、二人を取り巻く空気が凍る。

アリスの虚ろに変わった黄緑色の目がリーレットを写す。

「いつから……いつから気づいていたんだい？」

「ふふ、さあいしょつからよ。」

主でもない私に今まで付き合ってくれたこと、感謝するわ」

「……間諜のアタシを殺さないのかい？」

「あははっ！私に殺される気なんかないでしょう？」

それに私は今丸腰だわ、とリーレットは笑った。

「じゃあアタシに殺されるとは思わないのかい？」

「きつと貴女の従う命令には入っていないでしょう？」

「喰えない人だ。・・どうせなら隊長が居る時に言えば良かっただろうに」

「あら、言つて欲しかった？」

けど残念ね。どうせ言つてもあの子は負けるもの」

笑顔で淡々と言うリーレットに、アリスは怪訝そうな顔をする。

「何でそう思うのさ」

「貴女には分からないでしょうけど、ニシーノ民の強さは狂気の大きさに決まるの。」

アンダーの狂気は妃で薄れているから、きつとアンダーの辛勝ね。・・もしかしたら死んじやうかもしれないけれど。

でも、それで境ができるかもしれないわね」

「何だつて？」

（それで境ができるって、どういうことだ？

さつきエフが初夜を迎えなければ、境はできないと・・）

ますます不可解そうな顔をするアリスをリーレットは高らかに笑った。

「あらあら！見て分からなかった？」

やっぱり心つて傍で守ってくれる男の方に傾くのよ。妃も人間つてことかしらね。

そんな大切な人が死んだら、誰でも悲しんで安全を願うわ。愛し子が願えば神だって動くでしょう?」

（まさか、ユキはあの男を・・・）

アリスの顔がハッと目を見開く。

その表情を満足げに見たリーレットは、踵を返してニシーノへと歩き始める。

「あら」

しかしまた突然、リーレットは立ち止まって声を上げた。アリスはそれにつられて彼女の背中を見る。

「でもきつと境ができた方が、貴女たちにとって不幸ね」

ぼつりとそう言い残して、彼女は一人国境を越えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2010k/>

神運の子

2011年6月23日13時49分発行